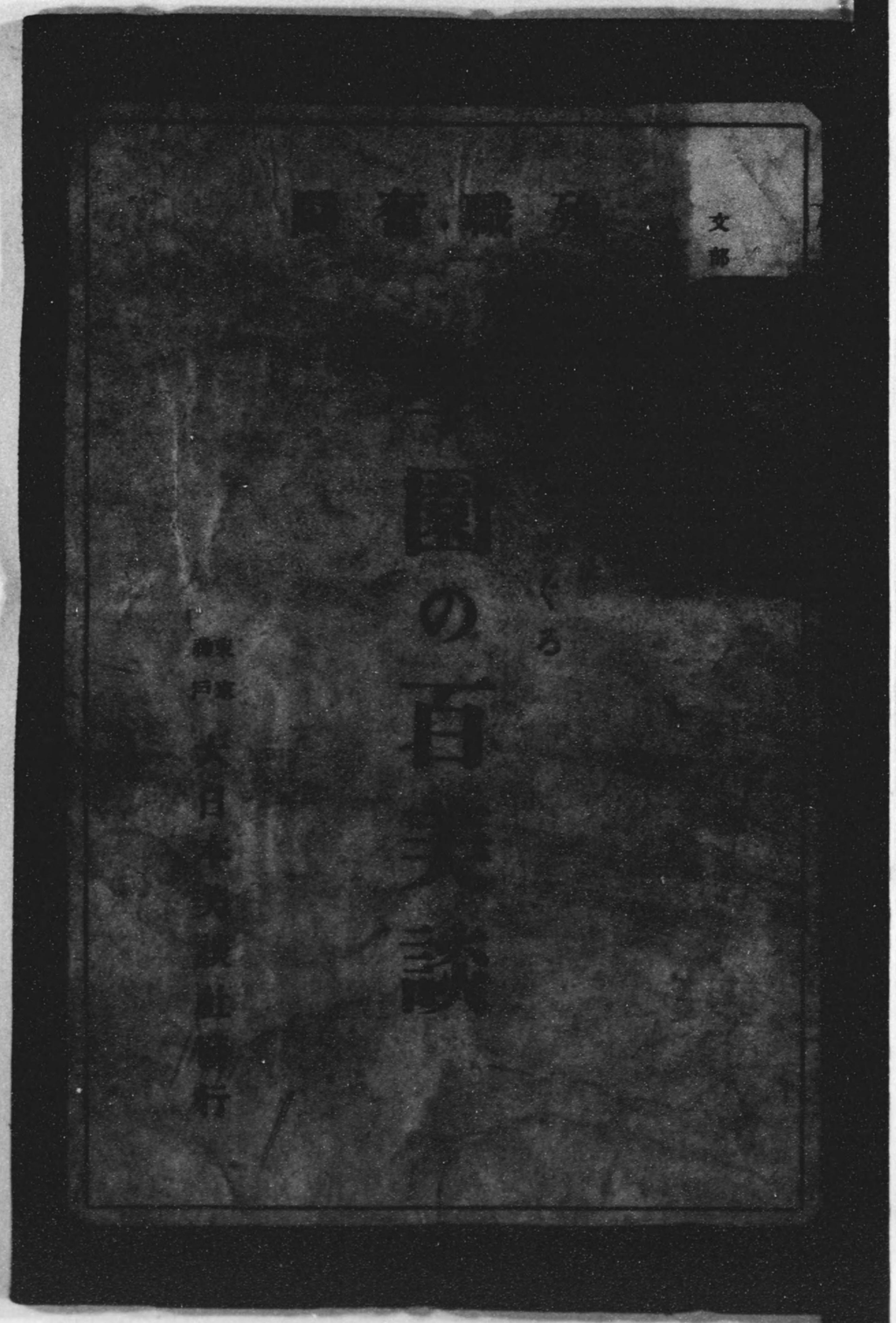


③

0042295000

0042295-000

特２１３－５７０

颱風水禍の生んだ学園の百美談

田淵巌・著

大日本美談社

昭和９

AHC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

殉職・奮鬪

學園の百美談

[illegible]水禍をめぐる

文部大臣 松田源治 閣下
大日本美談社 田淵龍 著

東京
神戸
大日本美談社發行

特213
570

文部大臣 松田源治題字

大日本美談社長 田淵巖著

殉職奮鬪

駟風水禍の生んだ

學園の百美談

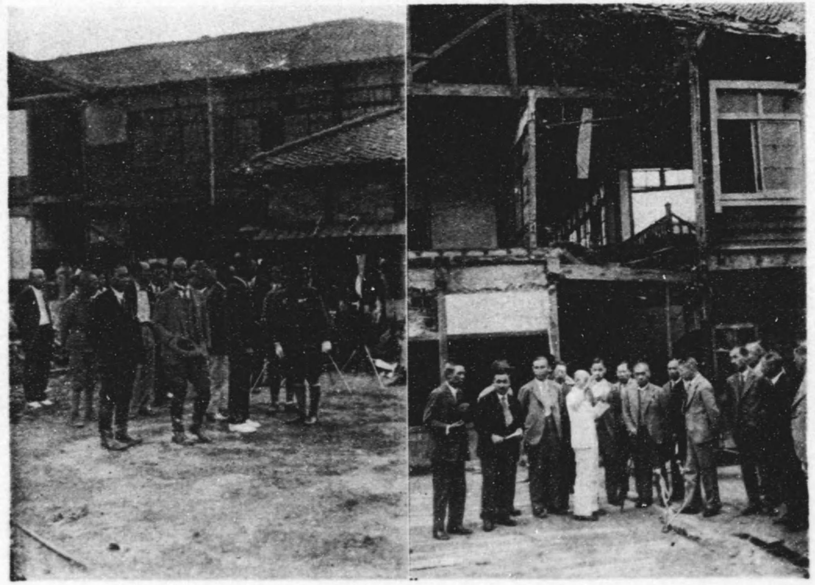
東京
神戸

大日本美談社發行

昭和九・一・三・〇・四
圖

羽寸題

罹災學校御視察の久松侍從



——後藤內務大臣——

——松田文部大臣——

被害學校視察の二大臣

噫殉職の教育者 〔其一〕

噫殉職の教育者 (其二)

大阪時事新報 夕刊

未曾有の猛颱風近畿一帶を襲ふ

聖上御軫念 宮城内の松樹倒壊

京阪神中心に暴威を揮ひ
慘絶！八十年來の大慘害
家屋倒壊算なく死傷夥し
大阪港に俄然一大高潮

浸水實に十數尺
打揚られた帆船無數
神戸港の被害

高潮實に五尺
漁師町被害甚大

大阪府の死傷者
千五百名を突破
倒壊六百戸 浸水十萬

國鐵未曾有の被害
下り急行吹飛ばされ
二百名河中へ墜落
瀬田川鐵橋で

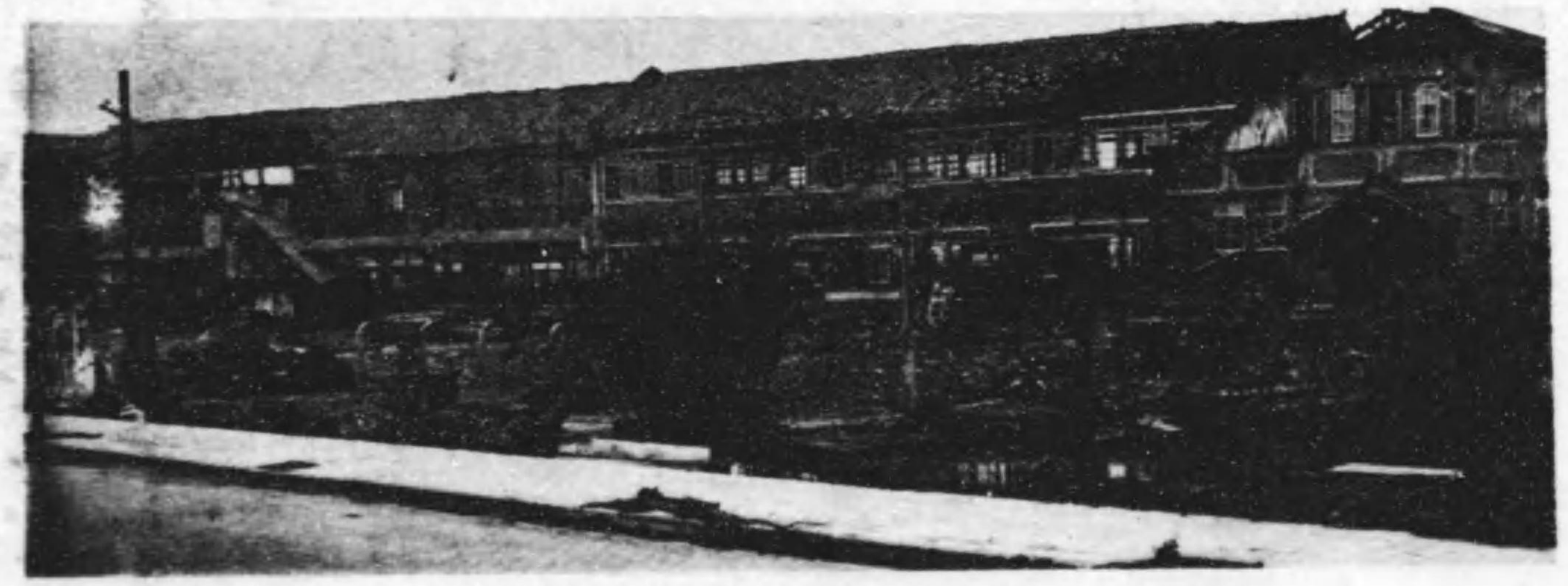
客車顛覆

世界の記錄破り
兇暴無比の風
驚異風速實に六十米

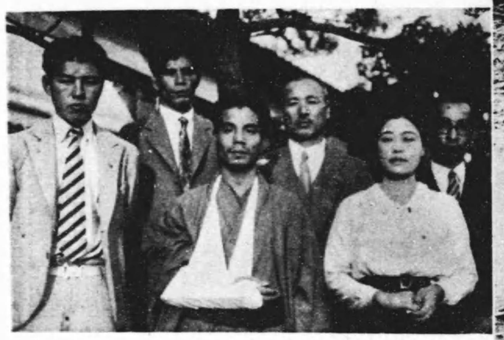
戰慄の猛颱風＝大阪の大慘害

吹き倒されし電車と大鐵柱を見よ

即夜大阪市の慘害を報ぜし
大阪時事新聞「廿一日夕刊」



颱風水禍を蒙りし堺市三寶小學校の殘骸



校舍倒壊に際し奮闘せし
兵庫縣尼崎小學校の六職員

京都府八幡小學校壊滅の跡

大阪府立茨木高女倒壊の慘狀

大阪朝日新聞

大颶風席捲・近畿空前の慘禍

風速實に六十メートル
慘死者數百名に上らん
內陸颶風で未曾有の記錄
關東震災に次ぐ大都被害

小學校舍の倒壞無數
哀れ學童の慘死算なし
尼崎尋高倒壞し
二百餘名が下敷
三十餘名は救ひ出したが
他は安否氣遣はる

風魔漸く衰ふ
復舊に努力せん
大阪府廳發表

兒童を抱いて
校長も壓死
熊野田小學校の慘

百名重輕傷
守口小學校でも

六小學校倒壞
堺市も被害甚大

豐南高等小學校
二百名下敷
數十名慘死の見込

暴風中に
小學校出火

味原小學校で
死者十二名

學校の倒壞
十數校に上る

京都全市に
倒壞家屋累々

京　於ける盛大なる學校葬〔淳和小學校〕

大阪に於ける悼ましきも多數の喪主達〔鶴橋第二小學校〕

慘禍の赤子へ畏き聖旨

聖旨傳達式

言語に絶する慘狀
巡視の侍從目を掩ふ

久松侍從、けさ來阪
聖旨傳達の後直ちに視察

新聞を通じて
聖旨を全府民へ
お傳へを願ひたい

久松侍從謹話

本社諸製作寫眞を
天覽に供し奉る

久松侍從の手許へ献上

大阪市沈鬱

痛恨！幼き精靈に捧ぐ

風禍に哀れ散つた
涙をさそふ尊き犧牲

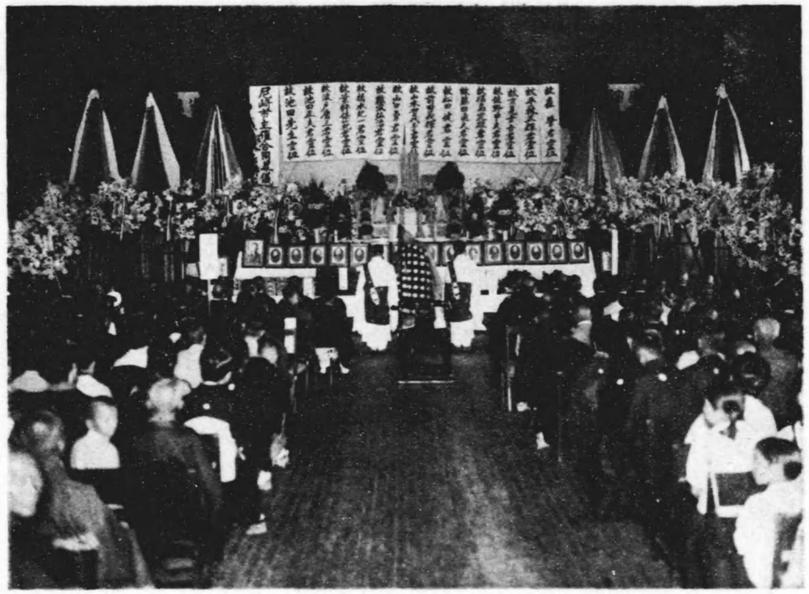
校舍の不完全から生む悲劇
偲ぶいたいけな面影

墓威に倒れた人々

大阪
京都
尼崎
堺

市内小學校
死傷者數

京阪神三都三府縣に亘る學童の悲しきも面影を掲げる
大阪毎日新聞



尼崎市に於けるる合同葬の盛儀

慰靈祭場に於けるる栗山訓導の遺族近親〔堺市三寶校〕

神戸新聞 夕刊

戰慄の猛颱風 近畿を襲ふ

風禍 水害 火災相次ぎ
死傷算なく未曾有の慘狀
通信・交通等の文化機關に大障害
都市的活動忽ち奪ふ

小學校倒潰四十餘
兒童死傷算なし
大阪市と府下の慘禍

天王寺の五重塔倒潰

慘禍の跡

住吉校

豐中南校

外島保
五百

神戸又新日報 夕刊

未曾有の猛颱風近畿を席捲す

戰慄の颱風眼に、
慘たり京、阪、神三都
風速實に廿米五十年振り
展開される地獄繪圖

玩具の樣な巨船
神戸港内で激浪にもまる
沈沒と衝突相つぐ

宮崎誠明

瀬田川鐵橋
七輛が橫

七號列車の
死傷

學校の
死傷

垂水、姫路間
つひに不通
明石驛前の各驛は
列車の立往生

神戸方面の慘害を傳ふる
神戸新聞 神戸又新兩新聞夕刊

颱風水禍と新聞紙（其五）

東都日出新聞　夕刊

慘たる暴風の被害

京都日出新聞　第二夕刊

戰慄！あの嵐の跡

判明の死者百五名
慘報刻々に擴大す！

重輕傷者なほ測り知れず

午後四時　府保安課の情報

中小學校死傷者内譯

復舊費は百萬圓

緊急市參事會で決

大風害に對する

山陽線不通

板門附近の各驛

嵐の中の天…

遺難者手當

新記錄！

秒

——颱風の爲め瀧田川鐵橋上に顚覆せし急行列車——

京都方面の慘狀を報ぜし
日出新聞　京都日々兩新聞夕刊

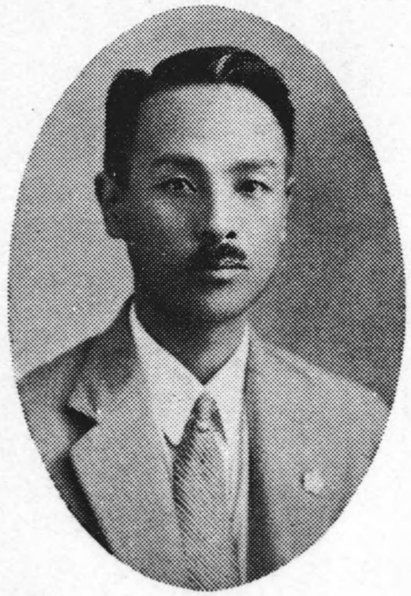
復興途上の小學校

……露天學校……

……テントー學校……

（日本國民雜誌「美談」之信條）

一、美談は精華である。
二、美談は龜鑑である。
三、美談は教訓である。
四、美談は師友である。
五、美談は道德である。
六、美談は寶玉である。
七、美談は規範である。
八、美談は指針である。
九、美談は感激である。
一〇、美談は光明である。



著者
大日本美談社長
田淵巖

自序

予嘗に水野內相、鎌田文相の題字序文を得て「噫！殉職の十訓導」を、勝田文相、澤柳帝國教育會長の題字序文を得て「現代少年美談」「現代少女美談」並に「殉職した教壇の人々」を夫々世に頒つた。

その意は即ち國民道德具現實踐の至上至美たる「善行美談」を以て、世道人心を益し、聊か國民道德の發揚、日本精神の振作に寄與貢献せんとするに在つた。

大日本美談社設立の趣意亦これに外ならぬのである。

今茲、大阪市を中心とし近畿一帶に惹き起されたる颱風水害は、豫想外に甚しく、その慘狀眞に面を掩はしめるものがある。著者亦親しくこの慘禍に遭ひ、被害者の一人として、辛くもその生をぬすむことを得たのは、天祐であつた。

然るに、この突發的風水害の中より、金玉と輝く美談善行燦然として映發、壞滅しつくしたる物的荒廢の中に、不滅の光輝を放つを見るや、直にペンを採つて立ち、慘禍の中を往いて、審にその眞玉を探り、不眠不休の努力を以てこの一書を物することを得た。

この間二句「至上至美なるもの」に對する一路の感激が、予をしてその間不斷の努力をつゞけしめたのであつた。

書中收むるところの多數の人物の行爲は、何れも今回の颱風水禍に當り、各其の地位職分にあつて、發揚されたる至高至純、まことに忠孝道德の極致、犧牲奉公の精髓を體現したるもの、一讀以て八千萬同胞を感奮興起せしむるに足るものがある。

就中二十二名の殉職教育者の悲壯崇高なる死の「行」と、熱烈なるその「心境」は、讀みつゝ思はず卷を掩ふて長嘆息せしめねば措かぬものがあるのである。

誠に日本精神の如實なる顯現！

忠孝道德實踐の、活ける龜鑑であると信ずる。

著者、就て親しくその個々の純境を探り、一路の感激に浸りつゝ血涙の筆を行る。

あゝ！祖國非常時局に直面し、日本精神發揚體現の聲上下に囂しき秋、この赤き血潮に彩られたる、眞の日本人としての百美談を世に贈る。

その徒爾ならざるを信じて疑はぬものである。

昭和九年十月

大日本美談社長
田淵巖

殉職奮鬪

颱風水禍の生んだ

學園の百美談

目次

第一章　天行健乎!?
一、新涼の近畿……（一）
二、颶風來！……（二）
三、暴雨加はる……（三）
四、あゝ秒速六十メートル……（四）
五、關東大震災の刹那を憶ふ……（六）
第二章　颱風禍の數的記錄
一、帝國產業の心臟破る……（七）
二、貴重な決死的の五記錄……（八）
A、風速、六十メートル……（八）
B、低氣壓、六百八十四ミリ……（八）
C、潮高、十三尺……（一一）

D、自動車より早い高潮のスピード……（一三）
E、颱風の眼は「住吉」……（一四）
三、慘憺たる西日本の被害……（一五）
四、大阪府市に於ける教育被害……（一七）
A、校園の被害狀況……（一七）
B、學校職員兒童の被害狀況……（一八）

殉職美談篇

第三章 細川大造訓導の殉職
近藤龍子訓導の殉職
——大阪市味原尋常小學校——
一、風向東より東南に變る……（二〇）
二、あゝ！二訓導死し、二訓導傷つく……（二三）
三、至高至純の行を語る訓導の死態……（二八）

第四章 池田敬止訓導の殉職
——尼崎市尼崎常高等小學校——
一、慘憺たる尼崎方面……（二四）
二、呪ひの巽風……（三四）
三、早朝の尼崎小學校……（三七）
四、凶變の前兆……（三八）
五、あゝ七時三十五分……（四〇）
六、高潮の襲來……（四三）
七、噫殉職！重傷！！……（四六）
八、盛大な合同葬……（五一）

第五章 阪根治三郎校長の殉職
——京都府八幡尋常高等小學校——
一、あゝ悼ましき慘禍損傷……（五七）
二、校舍倒壞の前後……（五九）
三、腸を斷つ吊葬儀……（六五）
四、死後の光榮……（六九）

第六章　栗山優訓導の殉職
——堺市三寶尋常小學校——
一、颱風來！津波來……（七〇）
二、あゝ！波浪と闘ふ俠訓導……（七三）
三、慕ひよる敎へ子の涙……（七九）
四、身を殺して仁をなすもの……（八二）

第七章　吉岡藤子訓導の殉職
横山仁和子訓導の殉職
——大阪府豐津尋常高等小學校——
一、中央校舍倒壞の前後……（八三）
二、三敎員の活躍……（八七）
三、奮闘負傷の二訓導……（九五）
四、六人の「命親」吉岡先生……（九七）
五、横山女訓導は三人の救ひ主……（一〇〇）

第八章　里見豐昌訓導の殉職
——大阪市姫島尋常高等小學校——
一、運動場を中に方形の校舍……（一〇二）
二、災禍前後の狀況……（一〇四）

第九章　仲埜テル訓導の殉職
平井ノブ訓導の殉職
——京都府向町尋常高等小學校——
一、病校長の悲壯な奮闘……（一〇九）
二、悲壯な守武訓導……（一一四）
三、悼ましい訓導毋娘……（一一八）

第十章　芦田政次訓導の殉職
——大阪市鯰江尋常小學校——
一、南北の校舍相ついで倒る……（一二三）
二、一死以て三名を救ふ……（一二七）
三、お父ちやんは學校よ……（一二九）

第十一章 飯野重義訓導の殉職
村上ノブヱ訓導の殉職
——大阪府如是尋常小學校——
一、三島野に孤立する校舍……（一三一）
二、承け繼ぐ教育者の血……（一三三）

第十二章 高塚武訓導の殉職
——堺市錦尋常小學校——
一、硝子窓を吹き飛ばす烈風……（一三五）
二、救援に駈けつけた二訓導……（一三七）
三、奉安庫に向つて萬歳をツ！……（一三九）
四、重傷にうめく五訓導……（一四三）

第十三章 新葉庄司訓導の殉職
——大阪市鶴橋第二尋常小學校——
一、任務は重し宿直勤務……（一四五）
二、古い南校舍危し……（一四七）
三、二生徒を救ひて殉職……（一四九）

第十四章 松浦壽する訓導の殉職
——京都市淳和尋常小學校——
一、雨中の第一時授業始まる……（一五一）
二、避難命令下る……（一五三）
三、四訓導の死傷……（一五五）
四、愛は死よりも強し……（一五七）
五、血涙共に下る弔辭……（一五八）

第十五章 森義住校長の殉職
——大阪市津守第二小學校——
一、病を冒して登校……（一六一）
二、全校生講堂に全し……（一六二）
三、襲ひ來る水魔をよけて廣場へ……（一六五）
四、御眞影を奉じて水中を玉出校へ……（一六七）

五、歸り來れば家は浸水數尺……（一六九）
六、名校長復起たゞ……（一七〇）

第十六章　盛山晴子教諭の殉職
——大阪府立茨木高等女學校——
一、風雨の中に鳴り渡る朝會のサイレン……（一七二）
二、講堂も亦危險……（一七三）
三、盛山教諭の殉職……（一七六）

第十七章　松田武行訓導の殉職
伊東綾子訓導の殉職
——大阪府北河内郡牧野小學校——
一、その朝の二訓導……（一八三）
二、尊き訓導の殉職……（一八四）
三、死體に偲ぶ愛の姿……（一八九）

第十八章　辻野利三郎訓導の殉職
——大阪市喜連尋常小學校——
一、仁俠の訓導……（一九一）
二、怨みの屋根瓦……（一九二）

第十九章　梅田キク訓導の殉職
——大阪府北河内郡三郷尋常小學校——
一、幼學年擔任は校母……（一九五）
二、しつかり樟の木におつかまりッ！……（一九六）
三、五兒を抱きしめた訓導の死體……（一九八）

第二十章　稲久保正夫校長の殉職
——大阪府豐能郡熊野田小學校——
一、七時には出揃ふ全職員……（二〇〇）
二、悲壯な校長の殉職……（二〇二）
三、村長の義擧、遺族を引とる……（二〇四）

奮闘美談篇

第一章　四十五名を救ふた『鐵腕級長』……（一）
第二章　最後の一聲『天皇陛下萬歳!!』……（一五）
第三章　水の勇者の七少年……（二九）
第四章　七訓導『愛の肉壁』……（三六）
第五章　少年給仕の殉職……（四五）
第六章　防空演習の訓練七百人を救ふ……（五三）
第七章　女先生の機轉、下水管へ避難……（六〇）
第八章　こんなになつたら、兵隊に行けないッ！……（六九）
第九章　三訓導の努力に、生徒百名の命全し……（七三）
第十章　下級生を庇ふ上級生……（七八）

謹んで本書を
殉職二十三氏並に
遭難學童八百の
靈に捧ぐ。

——著者——

颱風水禍をめぐる

談美百の園學

殉職篇

奮闘篇

大日本美談社長
田淵巖著

本書の無斷
脚色、上演
上映を禁ず
著者

社會教育本部
菅藝 田

第一章　天行健乎!?

一、新涼の近畿！

五十七年目の酷暑！と言はれたさしもの炎暑も去つて、こゝ天下の景勝茅渟(ちぬ)の海(うみ)をめぐる須磨、明石より阪神の街區より近畿一帶には、海と云はず山と云はず、街も杜も田甫にも、すが〳〵しい秋の氣がもよひはじめ、どの郊外電車も、勝景をかかげては街人を郊外へ誘ふプロパガンダに大童となつた。

新學期後の短縮期間を終つた小學校の校庭では、やがて來る樂しい運動會の練習に、先生も生徒も懸命の姿を見せ、二階三階の音樂教室からは、明朗なピアノの音が、天眞に歌ふ可憐の子等の歌聲に和して、明朗な初秋の韻律を奏でるのであつた。

……二百十日も二十日も無事に、すんで嬉しい秋祭り……

さうだ、　秋の祭!!　秋の祭!!　田舍の兒が、村の鎭守の氏神祭りの樂しさに對して、街の子には

大阪に「市民祭」があり、神戸には「港の祭」があつた。

あゝ街も鄙も、足らふた心で、のぞみの「祭り」を待つ、などやかな現在の氣分!!

そう云へば古來初秋の風韻事、仲秋三五の名月も、もうちきだつた。

二、颱風來！

この「平和」と「希望」の雰圍氣に、突如として耳をつんざく警報が傳へられた。

それは九月二十日午後三時、大阪測候所、並に中央氣象臺大阪支臺から發せられた　颱風來！　の警報であつた。

これより先、二十日午前六時、沖繩縣東南百粁の洋上にあつた颱風は、北方に驀進して二十日正午、奄美大島の南方三十粁の地點にまで近づいて來たのである。この時速、正に三十五粁、この颱風が今後進路をどうとるかは、九州、四國、中國、近畿それ〴〵の地區に重大な關係を持つことゝて、各測候所は科學の權威を傾けて、息づまるやうな觀測に沒入した。

しかも颱風は刻々その速度を增しつゝ北上し、二十日午後六時ごろには時速四十餘粁となり、九

州の南方に迫つたかと思ふと、突如その進路を東北にかへ、土佐沖を思ふがまゝに蹂躪しつゝ、室戸岬をかすめて意地惡くも我が國の心臟部、產業の中心地めざして襲擊し來たらんとする氣配を示した。

颱風來！　颱風來!!

この霹靂の警報に、京阪神三都五百萬の人々は、今の今まで抱いてゐた和やかな希望の玉を突嗟に捨てゝ立ち上つた

三、暴雨加はる

九月二十一日朝來よりの颶風は、夜に入ると共に强雨を伴ふて闇膽たる光景を呈した

而も神ならぬ人の子は、誰しもその寸後に、空前の慘禍あるを知る由もなく、雨戸を鎧ひ、夜の固め嚴にして、家族だち深き眠に入つたに何の不思議はなかつた。只海濱では啻ならぬ波風浪雨に、夜を徹して、船の護りに備へ、これが警備に當てゝ曉を迎へたのである。

明くれば九月二十一日、時刻外れの天氣のくらさは、よつぴて降りしきつた激雨の、尙止まぬ上に、物すごい風が暗雲を地上低く垂れこめつゝ東北さして狂氣の如く運びゆる爲めと知れた。

おゝ大暴風雨!!

凶きトひは當る。正しく警報は的中したのだ。家々は、戸を開くことさへ出來ない風雨の兇暴ぶりに、只觀念の眼をつぶるより外なかつた。

かくて時は刻々移り、すべての學校の始業時刻なる午前八時は近づいて來るのであつた。

四、あゝ秒速六十メートル

午前七時半ごろ。風雨の激しさ今や頂上の時、

勤勉!!

精勵!

平素、師の君よりの訓へのまゝに、かゝる時、かゝる風雨の時にこそ、萬難を排して定刻に後れず登校することを、此上なき善事、美德と、可憐な少年少女たちは父兄保護者の心配をよそに、桶狹間の義元を襲ふた信長のそれのやうに、文字通り嵐を冒し雨を衝き、强風烈雨に、目さきさへさだかならぬ道を、肩に勉强道具しかとせ負ひ、ビショ濡れとなつて學校へ〳〵と登つてゆく……

おゝこの姿!悲壯とも凄蒼ともたとへやうない光景は、啻に京阪神三都に限らず、この日この時刻——兇惡な颱風の進路に當るすべての地域の學校地區に、一樣に示されたいぢらしい姿であつたのである。

かゝる中にも刻々速度は增しゆき測り知らぬ惡魔の颱風は秒速實に六十メートルといふ、世界のあらゆる氣象臺にも、嘗てその記錄なき激しさを示した刹那、あゝ!!未曾有の慘禍は、地上に曖時にして現じ出されたのであつた。

牢記せよ、時正に大大阪に於て、

昭和九年九月二十一日午前七時五十五分!

五、關東震災の刹那を憶ふ!!

想ひ起す、大正十二年九月一日午前十一時五十六分！

あの關東八州を微塵にし、帝都を壞滅せしめた大震災勃發の瞬間を！それも文字通り突如たる一瞬間の一搖が、文化を一朝にして原始の荒野にかへした。

それとこれと――襲の震災には、これに續く呪ふべき火難が、弱き人の子を虐みつくさねば已まなかつた。然るに今の颱風禍には、引づく妖魔の水難が、冷たき魔手を下にひろげて罹災者を捉え虐げゆかんとは!!

あゝ！　かゝる時、神も佛もなきものか……

而も天變地異に對して、全く無力なる人の子は、すべてそのなすがまゝの暴虐に任せ、之を甘受しなければならなかつたのである。

震災には續く四日間の大火災に、手の下しやうなかりし苦き經驗を嘗めた關東ッ子のつきぬ恨みを傳へ、今は風禍につゞく四日間を、大阪ッ子は殘酷な水難に、如何ともせんすべなき懊惱と焦心を繰りかへす。　あゝ所詮人力は、はかなかつた……。

第二章　颱風禍の數的記錄

一、帝國産業の心臟破る！

かくてこの、見えざる惡魔の狂進するところ、山を撫で野を拂ひ、物を飛ばし家を倒し、人畜を殺傷し、工場、學校、神社、佛閣あらゆるもの例外なく縱橫無盡に荒らしゆき、破壞し去つた。

おゝ、その暴虐な破壞の跡を見よ、現代文化の一大根流をなす電力は無殘にもその動脈を斷たれ、光は一朝にして失はれ去つたではないか。あらゆる交通機關はその足を失ひ、すべての通信機關は聲を奪はれ去り、飛行機も、測候所も、都市生命の根源たる水源地さへもおびやかされた。否々、日本の現在にあつて交通文化の最高峯たる幹線超特急列車すら、その高度の進行の途上、皮肉にも湖上に架せる鐵橋上に於て、玩具の如く一瞬に轉覆され終つたでないか。

而もその間、僅かに二十分を出でず、惡魔は無氣味の咆哮と、無力な人力と文化のはかなさを、あざ笑ふ哄笑を殘して、遠く日本海の彼方へ去つてしまつたとは……

而もあゝ、此の狂暴の惡魔は、海の毒蛇を誘ひ滔々たる高潮は平靜銀盤の茅渟の海に、戰慄の鯨波をあげて襲ひ來り、あまりの突發的大破壞に茫然自失、爲すところを知らぬ災禍の子を、新に地上より二重に虐みつくさねば措かなかつた。

かくて大日本産業の淵源は、ハタとその活動を止め、軍需工業の殷賑忽ちに萎微し、煙の都は一朝にして虐無の潤空にかへつた。

祖國非常時に際會し、不慮の天災この地帶にいたる。天威暴虐果して何の譴(とがめ)ぞや。

予は今血涙してこれを惟ふ。

二、貴重な決死的の五記錄

(A) 風速六十メートル！

今日の慘禍を惹き起した魔の大颶風が、秒速六十メートルといふ世界氣象學界空前の、快速記錄を見事にキャッチしたのは、忠實な職務的良心と、嚴肅な科學探究の熱意とに燃える大阪測候所員技手辰巳善之助、同若林鐵藏二氏の沈死的冒險觀測の賜であつた。

すなはち大颶風襲來の二十一日午前七時、辰巳、若林の兩技手は前田所長、堀內技手、芝野技師

と十分の打合せをすませ、辰巳、若林兩氏が樓上觀測、前田、芝野、堀內三氏はこれを聯絡することになり、兩君は幾度か露臺に吹き轉がされつゝ、辛うじて三十尺の觀測臺上に到着、風壓計のもとに、鐵柱にがつしとつかまつて四つ這ひとなり觀測を續け、百三十尺の無電大鐵塔三基がボッキリと折れ、そのうちの一基は、兩氏が必死の觀測をつゞける鼻の先四尺と離れぬ箇所に、轟然火花を散らして落ちかゝり、觀測臺の鐵塔はフラ〳〵になり、兩氏の生命も文字どほり風前の燈火となつたが、二人ともなほ頑張り、つひに風壓計が舞ひ上り、風力計三基が飛び、銀盤日射計も自記雨量計も宙に舞ひ、觀測臺は完全に破壞されたが、兩君は奇蹟的にわづかのかすり傷を負ふたのみで、完全に任務を遂行して驅け下り、途中の三氏の觀測と綜合して、つひに世界暴風史上に特筆大書さるべき記錄を、見ごと完成したのであつた——

觀測直後、あの嵐の中で辰巳、若林二氏と前田所長とによつて認められた「死を賭して大颶風を觀測す。」と題する次の一文こそ、忠實な科學者の手記として、涙なしに讀み下されぬ生命の記錄と云へよう。

『二十一日午前二時五十五分、辰巳は「管內大警戒を要す」の最重要な第二次警報を、關係各方面に通達し終り、異常な緊張裡に夜を徹した、午前七時二十五分ごろより、風速は次第につのつてき

た。そのころ前田、若林、堀内相次いで、颶風中を匍匐しつゝ參集、芝野技師も病軀を押して匍つて來られた、かくて一同は「この分で進むときは、必ず世界的の大破壞記錄を出すであらう、觀測臺も破壞され、觀測者もまた吹き飛ばされるかも知れぬが、それも技術者の本懷である、死を賭して觀測臺を守らう」といふことに決し、辰巳、若林の二人が樓上に這ひ上つた、幾度か吹き轉がされて、轉々したが、幸ひにも臺上に辿りつき、風壓計の鐵柱を、命の綱と頼んですがりつき、風壓計監視をつゞけた。午前八時二分風壓計はグン〳〵上り、つひに六〇メートルのクライマックス！「あゝ！つひに內陸颶風における世界記錄を完全につかんだ！」われ〳〵はつひに、大自然の暴威の極度を見きはめて、無量の感慨が湧き起つた刹那、バーンと音がして風壓計は飛んだ、二基の風力計も、銀盤日射計も、自記雨量計もフワ〳〵と、まるで羽毛のやうに輕く飛び去つて、觀測臺は殆んど完全に破壞された、胴體はユラリ〳〵と小船に乘つて海をゆくやうに搖ぐ、「わが任務終れり」と感じて、今までの忘我の境から醒めると、驚くべし眼前四尺と距てぬところに、百三十尺の無電鐵塔が、ポツキリと折れて落下し、コンクリート上の鐵櫓に三〇センチ位もメリ込んで、觀測臺一帶フラ〳〵となつてゐる、いま二尺この鐵櫓に近かつたならば、二人の身體は木ッ葉微塵だ、いやそれでなくとも、このフラ〳〵の破壞の臺上に、强固な据付機はすべて飛び去つて、弱い人間

二人どうしてふるひ洩らされたか？全く天祐！神に謝しながら命からく〳〵這ひ下りた。ちやうどこの時の臺上の風力を判り易く記すならば、一間四方の板に三百八十貫の重みがぶつかつたわけになり、內陸の平地觀測で、六〇メートルの颶風を測候所において完全に觀測したのは、世界最初だと思はれるのである。

あの大鐵塔破壞が最後までどうして氣づかなかつたか、兩人だけでなく前田、芝野、堀內等も觀測終了まで、つひに氣づかずじまひである、心頭を滅却すれば音もまた無音なのかも知れぬ云々」

何と云ふ悲壯な、嚴肅な文字であらう。

(B) 低氣壓、六百八十四ミリメートル

二十一日早朝から、破格の大嵐に伴ふ通信機關の破壞に災せられて、中央氣象臺との聯絡を斷たれた洲本、德島の各測候所は、二十四日專用線の開通と同時に、暴風雨當日の低氣壓について、

德島測候所(午前六時)七〇六・八ミリ

洲本測候所(午前七時)七〇六・三ミリ

と夫々報じて來た。

然るに同日午後八時に至つて、四國の南端室戸岬の測候所が暴風雨後の第一電報として報告し來

つた數字は左の通りで、實に低氣壓の世界的記錄とされるものであつた。

即ち「室戸岬測候所に於ける二十一日午前五時十分の氣壓六百八十四ミリメートル」といふ驚異的な記錄を示したのである。

以て今回の慘禍原因を如實に示してゐると云へよう。

(C) 潮高、十三尺！

昨年、高潮襲來の守の爲に、天保山棧橋前に設置された大阪測候所築港出張所では、同所主任技手諏訪悅次郎氏が、不意の高潮襲來の爲め、觀測室が文字通り水浸りになつた慘禍の渦中にあつて妻子と老母を僅かに水上にある梁の上に避難させ、自らは觀測室にうづ卷く激浪の中を泳ぎつゝ、口に記錄用の筆を咥へて、文字通り決死の潮位觀測を果し、測候所本部で破滅絶望と見てゐた貴重な來潮、高潮、退潮の記錄を止め科學戰士としての功績をあげた、この諏訪技手の決死的記錄は次の通りである。

午前四時四九分——潮來襲

同　八時〇八分——人道上二尺七寸三分　(はじめて室內浸水)

同　八時一四分——高極　人道上七尺三寸四分、室內四尺六寸一分

同　八時二〇分——退潮開始

同　九時　〇分——人道上二尺八寸九分

同一〇時　〇分——人道上一尺三寸七分

同一一時　〇分——人道上八寸八分

午後五時四〇分——平水化

これによれば高極に於ける潮高は、實に平水面を越すこと十二尺九寸八分であつたことが知れ、當日の戰慄すべき大阪灣沿岸一帶の水魔の動きが知られて、肌に粟を生ずるではないか。

(D) 自動車より早い高潮のスピード

引づゝく氣象臺、測候所並に之が所屬支所出張所、及び關係諸機關の協力による懸命な調査によつて、今回の高潮のスピードが檢出された。即ち

毛馬閘門	午前九時二十五分(高極)	十二尺增水
寢屋川新喜多橋	午前九時二十分(高極)	十三尺五寸增水
北區鉾流橋	同　九時五分(高極)	十尺二寸六分增水

東　區　今　橋—同　八時四十分(高極)　十一尺五寸增水
北區端建藏橋北詰—同八時五十分(高極)　十二尺二寸增水
西區松島橋東詰—同八時三十分(高極)　十二尺三寸增水
大正區大正橋—同八時二十七分(高極)　十三尺二寸增水
築港大棧橋—同八時十四分(高極)　十三尺增水

これによると、今回の高潮の速度は、築港棧橋から大大阪のシビックセンター今橋を衝くまで、か二十六分の短時間、築港—大正橋間十三分、築港—毛馬閘門間一時間十一分間といふ怪速度を示し、その速さは市街地に於ける規定自動車疾走の速度よりも早い程度であることが立證された譯である。

(E)「颱風の眼」は住吉

尙今回の颱風眼の中心が降下した箇所は、阪神沿線住吉であることも、諸種の研究調査によつて明にされ、斯界の權威者によつて、引つゞき實地踏査される手筈になつてゐる。

三、慘憺たる西日本の被害

狂暴の颱風一過、被るところの西日本各府縣の損傷は、大阪府を筆頭に、量ることの出來ない深刻なものがある。

今、九月二十五日現在、其筋の調査に加ふに、學校關係の數字を添へて次の表を得た。

西日本各府縣被害狀況

府縣別	死亡	負傷	行方不明	建築物倒壞流失	學校被害	道路決壞流失	橋梁破壞流失	農作物被害	總損害高
大阪府	一・六二四	三・八九五	三九	三・六四〇	一二九	三一〇	九	一六・七〇〇・〇〇〇	未詳
京都府	三一〇	一・六〇四	二	六・五七八	五一	五八七	一一六	一〇・〇〇〇・〇〇〇	三〇・〇〇〇・〇〇〇
兵庫縣	二〇五	八三五	一一〇	五・七九九	八	六七七	三四六	一三・五八一・〇〇〇	五〇・〇〇〇・〇〇〇
滋賀縣	四四	五五六	一	五・三八二	三	一四	一〇	八・三四四・〇〇〇	一七・〇〇〇・〇〇〇
奈良縣	一〇	三四四	—	一・四六〇	一七	未詳	未詳	三・〇〇〇・〇〇〇	五・〇〇〇・〇〇〇
和歌山縣	二五	三〇五	一三	五・六八七	—	二六五	五九	三・〇〇〇・〇〇〇	九・五二六・〇〇〇
愛知縣	五	三一	一九	一・二四四	—	未詳	—	未詳	未詳

三重縣	四	三〇		一・三七	四	三〇		五・〇〇〇・〇〇〇	一〇・〇〇〇・〇〇〇		
岐阜縣	一五	一〇六				三・一九八	一八	四一	三	一二・一四七・〇〇〇	一三・三五一・〇〇〇
富山縣		三				四〇		四	三	未詳	一五〇・〇〇〇
石川縣		九		五一				一六	二	五六二・〇〇〇	七〇〇・〇〇〇
福井縣	八	一四	七	三五五				六七	三五	五七七・〇〇〇	一・七三一・〇〇〇
岡山縣	八一	三〇五	一〇五	三・二四九				二・一〇二	七八〇	六・〇〇〇・〇〇〇	七〇・〇〇〇・〇〇〇
廣島縣	九	一三	一四	七九九				五	八四	二八〇・〇〇〇	五四〇・〇〇〇
鳥取縣	七二	二九	九	五九五				一六四	二九三	五・〇〇〇・〇〇〇	三〇・〇〇〇・〇〇〇
島根縣	一	五		四四				三六〇	一三	未詳	未詳
香川縣	九	三〇	八	一・三五九				七六	三四	四・三〇〇・〇〇〇	五・八五七・〇〇〇
愛媛縣	二〇	八	一七	二一〇				三四	一八	一・〇〇〇・〇〇〇	五・〇〇〇・〇〇〇
德島縣	三〇	一八二		五・〇五二				三三三	二四	九・九三四・〇〇〇	一四・〇八四・〇〇〇
高知縣	七二	三〇三	四五	四・一一七				未詳	未詳	三・五〇〇・〇〇〇	一〇・〇〇〇・〇〇〇
合計	二・四六四	八・二六六	五七九	六九・九七六	二八九	五・二三二	二・〇〇三	一〇二・七〇六・〇〇〇	三一七・八四三・〇〇〇		

あゝ、人の生命の奪はるもの二千五百、傷者を加ふれば實に一萬一千に垂んとする數字を又全半壞並に流失家屋の數は七萬の巨數を數へ、道路橋梁の破壞流失、決潰等七千件に上る。

就中、可憐の少年、少女多數の魂を無慚にも奪ひ去つた學校の被害は、三百校に及ぶ戰慄的數字を示すのである。

若し夫れ、この風水禍が各府縣の農作物に與えし被害、工場其他諸建築物の蒙りし損傷等を數へ擧ぐれば、その損害は優に十億萬圓を超すこと遙かなるべく、況んや本表以外海濱部に於ける船舶の被害甚大、損傷被害推定隻數、優に二萬を算するを加へる時、自然一瞬時の戲れの、餘りに殘酷なりしを呪はざるには居られぬのである。

四、大阪府市に於ける教育被害

今茲の颱風被害中、その最も深刻を極めた大阪市に於ける教育被害は(九月二十四日現在)實に次の通りである。

(A) 校園の被害狀況

一、小學校…全倒壞四、一部倒壞四五、傾斜及大破六五、浸水一六

二、中等學校…一部倒壞三、傾斜及大破四、浸水二、

三、幼稚園…一部倒壞二、傾斜及大破三　以上合計一四四校園

(B) 學校職員兒童の被害狀況

一、小學校職員…死亡六名、重傷六名。輕傷一七名、

二、小學校兒童…死亡二五一名、行方不明二〇名、重傷二三四名、輕傷三四一三名、

三、小學校使丁死亡二名、重傷一名、合計七七八名

而して死亡兒童二五一名の、學年別員數は次の如く、犧牲の兒童が四年以下の低學年に多いことが今更の樣に人々の涙をしぼらせるのである。

一學年	男二六	女一三	計三九
二學年	男三五	女二九	計六四
三學年	男一一	女一三	計二四
四學年	男四一	女二二	計六三
五學年	男一三	女二四	計三七
六學年	男七	女八	計一五
高等一	男三	女一	計四
同二	男三	女二	計五

尙、大阪市以外の府教育被害として府學務課の發表せるものは(二十二日現在)次の通りである。

	死亡 兒童	死亡 職員	全壞	半壞	一部
堺	三八	二	一	一	四
岸和田	—	—	—	—	一
三島	八七	二	三	五	二
豐能	六五	三	一	一	三
泉北	二	—	五	三	七
泉南	—	—	一	五	六
南河內	—	—	四	二	五
中河內	二九	一	二	四	九
北河內	七二	三	六	七	三

あゝ、府市を通じて殉職教員十七名、死亡兒童五百四十七名！

以て今回の颱風禍が學校中心に演ぜられた事を推すべく、痛恨いよ〳〵深きを覺えるのである。

第三章　細川大造訓導　近藤龍子訓導　の殉職

——大阪市味原尋常小學校——

一、風向東より東南に變る

この日、朝來の烈風强雨を衝いて勤勉の子等は陸續と登校して來た。

——では、山田首席以下大部の訓導が、ビショ濡の被服を着換へ乍ら、烈風雨時の登校の困難さや時ならぬ强風に、不覺にも傘を奪はれた市民の右往左往する笑へぬ街上の目擊談などに、話の華をさかせてゐた。

一しきり、そうした話題に賑ふと、今度は誰からとなく、心は同じ敎へ子の上へと話が向つていつた。

「實際こんな時つく〳〵思ふね、生徒は精勤なもんだな。」

「全くだ。さつきなど、半濡になつた小さいのが——多分一年生だらうが、元氣に歌を歌ひ乍ら

來て居るのを見て、涙ぐましくなつたよ。」

「オヽ、もう四十五分だ、大分來たらう、オヤ風が……」

そう云つた時、思ひなしか、今までにない烈しさでビューッと横ぶりに吹きつけた風に、U字形の凹所に當る職員室が、ユラッ！と搖いだやうに感じた。

並居る訓導達の顏は、その刹那さつと緊張した。

「風は東からだな。」

誰かゞ云ふのに答へもせず、訓導たちは、

「敎室が心もとない。」

とばかり、云ひ合した樣に席を立つて、それ〴〵擔任の敎室へ、敎へ子の事を案じ乍ら、急ぎ足に出ていつた……

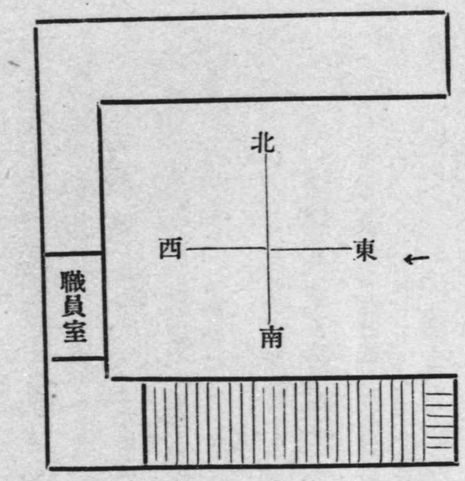
風は一刻々々激しくなつてゆく、雨も愈々猛烈に東から横なぐりに打ちつける……

ビュー！ッ　ビューッ!!

と云ふ風雨のうなり聲に呼應して、各敎室では、時ならぬ「あらし」に、心の平靜を失つた生徒達のさはめきや叫喚が、何等かの凶兆のやうに起る。

ガタ〳〵と硝子窓の叩かれる音、僅かの隙間から吹きこむ刺すやうな風と雨！町家の家並に比べて、やゝ高みに建てられた二階建校舎は、一きは激しい風當りに、烈風が吹きつけゆく毎に、無氣味にゆら〳〵とゆらぐ……

大阪市味原小學校平面略圖



倒壊二階建校舎

「いよ〳〵暴風雨だぞッ！」

校長見えぬ學校の責任を一身の上に感じた山田首席は、かう獨り言のやうにつぶやくと、在籍一千百、二十學級を抱擁する學校當面の處置について考へつゝ、はぢかれる樣に職員室を出たと、ビューッと吹きつける雨風！

この時風向は、早や東から東南に移つてゐた

「オ、巽み風になつた。いよ〳〵危險だッ！早く校長が登校るといゝんだが……。」

山田首席は、激しい雨風の中を、ぬれ鼠のやう

になつて全校舎を一まはり見廻りにゆく。時に午前七時五十分！

二、あゝ！ 二訓導死し、二訓導傷つく !!!

味原校U字形校舎中、巽からの強風を眞向に受ける二階建校舎八教室には、一年、二年、三年の幼年組が收容されてゐた。

常、平生でも、手のかゝることなみ〳〵でない幼學年組が、かうした變事に際しての管理には、一しほの苦心があつた。

この日、二年三組擔任の近藤訓導と、一年三組擔任の前田訓導とは、常より早く出勤すると、濡れたコートを脱ぐ間も惜しく、

「このはげしい雨風！定めし缺席する者も多からうが……登校てゐる元氣者もこのあらしでは、親を離れた雛どりのやうに、只オロ〳〵と小さい心をふるはしてゐるであらうものを……。」

と思へば、瞬時も教室に留つて居られず、宙を飛ぶやうに夫々受持教室へかけつけたのであつたが刻々はげしくなり勝る雨風に、小さき教へ子の上を案じ乍ら、雛を抱く親鳥のやうに、不安と怖しさに、「先生、先生。」とつどひよる子等をしつかとかばひつゝ、今に何とか校長から指令のある

ものと、ゆらぎ一きは激しい風上の校舍に、身も世もなく、うちおの〻く敎へ子達を、すかし勵ましてゐた。

兎角する中にも、大暴風雨の脅威はいよ〳〵加はつてゆく……

どうした事か、校長はまだ登校して來ない。こゝに於て、

校舍を一巡した山田首席は、斷然全校兒童の避難行動を執るべく決意した。

ぬれ鼠となつて慌しく職員室に駈け歸つた山田首席は、これも今し、階上の二、三年敎室を見まはつて歸つてきた圖畫專科の細川訓導に向つて、

「オ、細川君ー大變なこつた、この調子ぢや、あの校舍が一番危險だ。それに生憎、學年が小さいので一層案じられるのだ……。」

と、嵐の中の南校舍を指した。

「そうです。僕も今氣になるので一寸二階へ上つて見て來たのですが……。何にしても早く子供を外へ移さんと……。」

「そうなんだ。では、君、二階を賴む、各受持と連絡をとつて早くね。」

そこへ、高二擔任の萩野訓導が、轉ぶやうにかけこんで來た。

「山田先生！南校舍が危險ですぞッ！今僕の敎室から一寸見たんですが……。」

「オ、、そうなんだ、君も賴む、今、細川君に行つて貰ふやう賴んだところだ。」

「よろしい。ぢや——。」

二人の若い訓導は、矢庭に南校舍の階上敎室さして飛んでいつた。

と、それと入れ違ひに上級擔任の木村訓導、鹿戸訓導の二人が、同じ思ひにかけこんで來た。

「先生ッ！南校舍が……。」

「そうなんだ。が—君等の組の方は大丈夫か？」

「え〻、何といつてもこちらの校舍はね。」

「そうか、ぢや一つ、一二年をこゝへつれて來て貰ふか。」

「よろしい、この職員室が一番安全です。」

そう云ふのと、二人が南校舍階下の煉瓦廊下へ飛び出すのと一緒だつた——。

一方階上へ駈け上つた細川、萩野の二訓導は、廊下をかけ乍ら大聲で怒鳴つた。

「先生ッ！避難!! 避難!!! 西校舍へ——早く〳〵。」

その聲に四つの敎室から、どつと一時に生徒が飛び出して來た。

「慌てるでないぞッ！階段に氣をつけて――ころぶな、つまづくなッ……」

聲をからして擔任訓導と共に避難生徒の整理につとめる二訓導――

階下では、爲すことを知らぬ一年生、二年生が、職員室に近い一年一組から順々に、受持訓導と森、鹿戸二訓導に護られ乍ら、吹きすさぶ嵐の中を危つかしく職員室へ……

かくて一組の移轉は終つた。

つゞひて一年二組の避難も完了した。

此の時、階上ではもう三年の二組と二年の一組が、敏捷な避難行動を終へて居た。

一分……二分……三分半……狂暴な巽の風は、いよ〳〵吹き募つてゆく。

細川訓導は嵐のとつばしに當る南階段で、引のばす思ひに最後の二年生たちを救ひ出してゐた。

もう二分！否一分ですべてが完了するといふ貴くも際どいこの時。

階下では、最後の一年三組の近藤訓導學級が、前田訓導の二組につゞいて、今や避難行動に移らうとする時！

一きは凄い惡魔の咆哮に似た突風が、强雨をふくんで「ビューッ!!」と吹きつけた。

と、「メリッ！」と斷末魔の響と共に、南校舍は瞬間に地上へ叩きのめされる樣に倒壞してしま

――倒壞直後の大阪市味原小學校――

つた。同時に、こゝかしこから、

「ウォーッ！」「キャッ！」

といふ生命のうめきが、物凄く湧き起つたが、それも束の間、あとは忽ち死の靜寂にかへつて、心なき風雨が無慚に吹きまくるばかり……時に午前七時五十五分！

と思ひ出した樣に、職員室に充滿した可憐の一二年生が

「ワッ！」とたまぎる樣な叫喚をあげて、身も魂もそはぬやうに號叫する。

西校舍の階上教室からは上級生たちが、どつと雪崩をうつたやうに駈けて降りてくる。

「學校が倒れたッ！」

「先生助けてッ！」

叫び聲、泣き聲、恐れ！　戰慄!!　失神！「自失!!

而もそのすべてがほんの一瞬、一刹那の出來事であつた

三、至高至純の「行」を語る訓導の死態

學校倒壊！
職員兒童遭難!!

の凶報は、解散家庭避難を命ぜられた上級生徒によつて忽ち校下に傳へられた。

父兄が〻けつける。

消防隊、青年團員がくる、玉造署からは逸早く署長自ら四十餘名の署員を引率して、つゞいて三十七聯隊からは、中角少尉の指揮する一隊が夫々救援に駈けつけた。

かくて風雨中を、悼ましい倒壊校舍の發掘救援作業が、默々裡に、而し驚くべき急速さをもつてはじめられた。

が、何をいふにも巨貫の倒壊校舍のことである。どうすることが、最も早く、安全に埋沒されてゐる職員生徒を救出することになるか、嘗てない異常事變に直面した今、誰とて成案がなかつた。只頼母しい果敢敏速な中角少尉の指揮する軍隊を作業統制の中核として、涙ぐましいとなみは始まつたのであつた。

かくて作業の進むにつれ、人の目を掩ふいたましい鮮血に染つた慘死兒童や、外傷なきもどこかの打撲による內出血致死の生徒たちが、續々と發見され涙と共に講堂へ、職員室へと運びゆかれる

そうかと思へば、其の中に不思議な運命に微傷だになく救ひ出される幸運の兒もある。悲喜交々感情交錯、只涙！涙!!涙!!!

その時、フト埋もつた下方のどつからか、はげしくノツクする音が聞えた。

「さては生存者ッ！」

と人々は、闇中に光明を得た思ひで、その音する邊の發掘にかゝつた。漸く穴が明けられた。

「誰か。」「どこだ?」

人々の視聽はこの穴に集まる。

「僕だ、萩野です。」

その聲に、

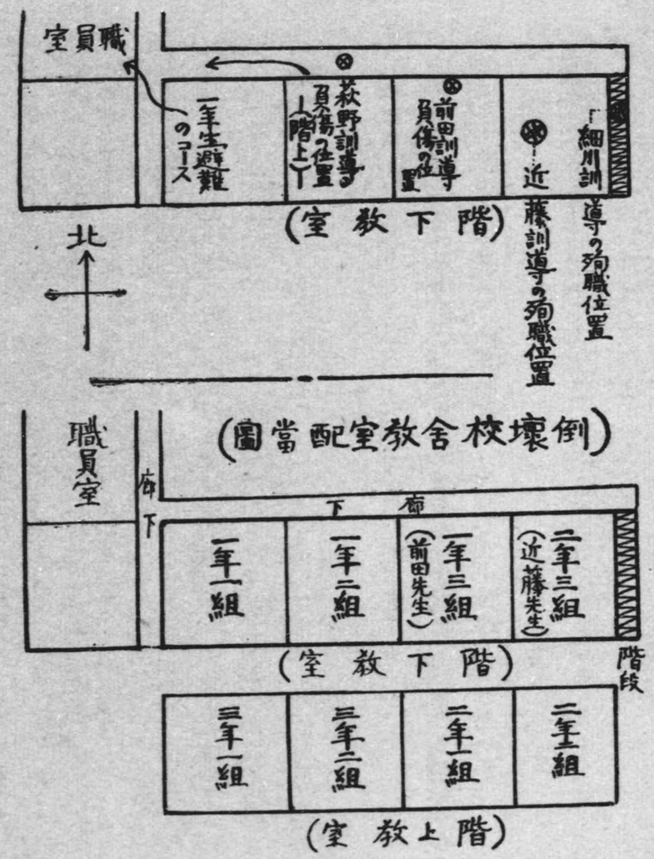
「ヤ！萩野先生だ、萩野先生だッ！」

人々の聲が歡びにぞめく。

「僕は大丈夫、只どうしても動けぬ、それより早くこの梁の隣の子供達を……それに、こちらの

方にもさつきから、苦しんでゐる子供が居るのだッ……」
その聲は苦しさに低く、杜切れ勝ち乍ら、救援の人々を感激させずには居らなかつた。
「オ、先生ッ！しつかりして下さい。大丈夫々々々、生徒もすぐですよッ！」
勇氣百倍、作業はみる〳〵捗つてゆく……
やつと救ひ出された萩野訓導は瀕死の痛傷も忘れて、同じく救ひ出された生徒を抱いて救急室へ運ばうとする。
「危いッ！先生!!大變だ、先生の身體が……」
「なアに、僕なんか何ともない。」
と云ひ云ひ立ち上つたと思ふと、忽ちパタリとそこへ倒れてしまつた。
校舍の下に埋まり乍ら奇蹟的に助かつた森訓導は救ひ出さるゝやその場ですぐ救援作業にかゝる後頭部に裂傷を負ふた鹿戸訓導は、あり合せの布で傷部をぐる〳〵繃帶して、同じく救ひ出しに夢中になる。
程經て、倒れかゝつた梁に腰部を强打され、身動きならぬ瀕死の前田しづ子訓導が、ぐつたりとなつた姿で發見救ひ出され、雨の中を職員室へ運ばれたが、訓導は手をしきりと動かし〳〵、囈言

の樣に、
「大丈夫々々々、しつかりおし——泣くのぢやないよ、ネ ネ ネ。」
と云ふかと思ふと、今度は急に大聲で、
「アレ〳〵、子供が死ぬ、早く〳〵……。」
と口走る。かうした中にも一途に兒童を思ふ愛の言葉が、取卷く看護の人々の腸を斷たせた。
最も慘死兒童多しと推定された南階段の邊からは、お〳〵無慚!!頭部を粉碎されて鮮血に染まり、左手に死してもはなさぬ堅さに、敎へ子の一人を握つて慘死せる近藤龍子訓導が發見された。
「オ、、近藤先生がッ！」
と叫んだまゝ、一同は思はず慟哭、しばらくは茫然自失する。と、
ア、何たる事ぞ、この時、人々のさはめきに蘇つた樣に、訓導の右腋の下から、敎へ子の一人の一年生が、微傷も負はぬ姿で、無言のまゝではひ出して來たではないか。
「オ、生徒が……」
「近藤先生の下から……」
「あゝ、何といふ……」



人々は又しても感激の涙を呑む

やがて、近藤訓導の屍體は、人々の涙の洗禮を受け乍ら、厚く校舎へ移されたが、その時その左手は、しつかとつかんでゐた死せる敎へ子から、容易に離れなかつたとは引つゞき、最

後まで二階敎室南端の、二年二組生徒の避難に專念して居た、細川專科訓導の慘死體が發見された

細川訓導は、風雨最も激しい南階級の上り口にあつて、階段を降りる二年生を、煉瓦廊下を傳ふて西校舎の職員室避難場へ、引つぎ〳〵送つてゐたが、殘りの六七人とおぼしき中の二人の手にとつて、「ソレ！」と押しやるやうに手放しざま、つゞ息も遲しと、次の二人を又も廊下へと抱きかゝへるやうに送つた刹那、遭難したものであつた事は、最後に訓導に助けよつて送られて奇蹟的に助かつた二年生、宮本照三生の告白によつて明白となつた。

階段の板と、おしかゝつて來た梁に挾まれて、胸部を壓しつぶされた訓導の死體は、左足を階段の下二段目にかけ、左手を高く階段上に伸したまゝ顏を上方に向け、さながら最後の敎へ子二人がさしのべる手を、待つてゐるかのやうに見えた。

校長初め並居る救援の人々は、又しても暗然として涙をのんだ。

× × ×

かくして悲慘な作業は、默々裡に終つた。遭難の慘死者、訓導二名、兒童十六名、重傷訓導二名兒童五十九名。

噫!! 悼ましい哉。

第四章　池田敬止訓導の殉職

——尼崎市尼崎尋常高等小學校——

一、慘愴たる尼崎方面

九月二十一日午前七時ごろから八時に至るほんの小一時間の間——空からは巽の方より吹きまくる秒速六十メートルの狂颱風が、覆す樣な暴雨を伴ふて襲ふてくる、海からは時ならぬ津浪と高潮が五尺、一丈の高さを以つて滔々とひた寄せに寄せて來る……この天地兩面よりの惡魔の挾擊に遭ひ、こゝ攝州尼崎市を中心とする商工低地帶一帶營々として久しきに亘り、人の子が建設した高度文化も、瞬時にして一たまりもなく原始の荒廢に還元され終つた。

倒壞大工場十六、同人家數百戸、浸水家屋に至つては八千戸に及び、人命の喪はるゝもの七十餘名、傷つきし者二百名に垂んとする悲しい記錄を印したのであつた。

二、呪ひの巽（たつみ）風!!

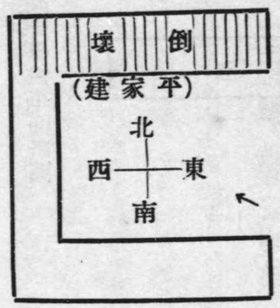
この間にあつて尼崎市中央部に位する、北城内の尼崎尋常高等小學校の二階建校舍倒壞、木ッ葉微塵となり、引つゞく高潮の襲來に、全校三尺の高さに及ぶ慘愴たる水浸りの憂目にあひ、死傷教師兒童の救援作業が、風雨中の水中に行はれる悲愁事を見た。

而も呪ひのこの巽風は、同時刻に尼崎に隣接する川邊郡小田村の三小學校を倒し、多くの小さき生命を奪ふの暴虐を敢てせねば措かなかつたのであつた。

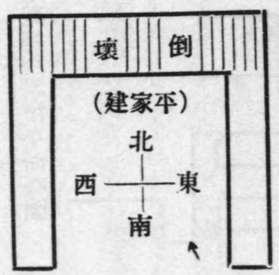
あゝ呪ふべきこの午前七時半の巽の猛突風よ!!

その如何に狂暴振りを發揮したかを、遭難の四校舍について見れば、誠に顯然たるものがある。

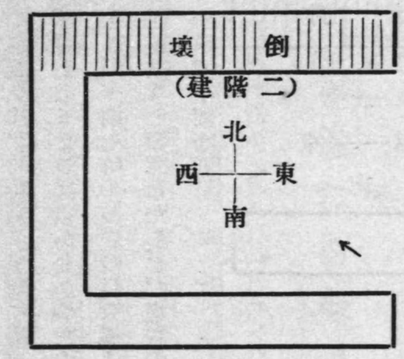
小田第一小學校平面略圖



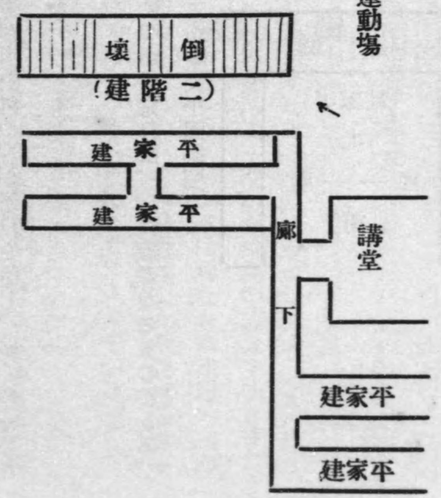
小田第二小學校平面略圖



小田高小學校平面略圖



尼崎尋常高等小學校平面略圖



即ち、それがよし平家建であつたにせよ、二階建であつたにせよ、巽よりする狂强突風の向ふところ、例外なく――その建築年月日の新舊を詮議する餘地なく――すべて、その魔手に倒され終つて殘すところないのである。

その辛うじて倒壞の難を免れし部分を見るに、校舍相互がそれ〴〵支柱の役目に結びつき、若くは高さに於て倒壞校舍より低く、風當り少かりし等の理由が看取されるのである。何にしてもこの憎むべき狂突風は、彼の過ぐる大正十二年九月一日の關東大震火災突發當日、隅田川邊に起つた火の旋風が、本所被服廠跡に避難せし四萬數千人の靈を一擧に葬り去りしそれの如く、京阪神三都にかけて二百五十の校舍を將棋倒しに倒しつくし、幾千百の可憐な小さき靈を奪ひ去つた呪ひの惡魔であつた。

筆者は今涙新に、この巽突風のすぎ行きし瞬間〻〻を懐ふ。

三、早朝の尼崎小學校

この日尼崎尋常高等小學校では、松本校長初め全校職員三十五名、朝來の强風雨を衝いて午前七時といふに早くも出勤、二十日を以て終つた短縮授業を承けて、今日から愈よ本格の全日授業に全力を注ぐべく、何くれとなく教授準備にとりかゝつたのであつた。一方兒童達も、降りしきる雨も將又吹きつのる强風もゝのかは、今日からいよ〳〵辨當持參の、「ほんたうの勉强がはじまるのだ」と許り、時間を守れ の平常の徹底した訓練を如實に、づぶ濡れ姿で元氣よく續〻と登校して來た

かくて、七時……十分、十五分、二十分……と、時間は刻々授業開始豫鈴に近づいてゆく……それと共に、風は益々强くなり、雨は愈々激しくなりまさり、古い木造校舍には各所に雨もりを生じ、一吹き毎に氣味惡いゆらぎが、すべての者を氣味惡るがらせた。

かくする中にも時は進み、長針は三十分を指して運命の如く一つボーンと打つた。

四、凶變の前兆!!

この時校長室にあつた松本校長は、普ならぬ狀況を目擊した。

學校正門の横に大盤石のごとく植ゑられた記念の大ヒマラヤシーダーが、折から吹き募つた强風暴雨に、あらうことか「アッ!!」といふ間に、根こそぎ横倒しに倒されてしまつた。

「コレハいけない。」

松本校長は、慌しく中廊下一つ隔てた隣の職員室へ飛びこみざま叫んだ。

「オイ! 學校が危險だぞッ!早く 早く—」

が、その時はもう職員室は人まばらに、大部の職員達は、校長の命下るまでもなく、濡れ鼠の姿で登校するや否や、息のつく間もない慌しさで、夫々心に案ずる我が受持學級教室へ、教へ子の身

を氣づかひの餘り、宙を飛んで行つてゐた。——

校長は飛ぶやうに中廊下を、北側の唯一の二階建校舍の方へ駈けて行つた。

見ると、二階教室では高等一、二年の女子たちが、髪をみだし着衣をぬらし乍ら、吹き募る風雨に横薙ぎに吹き飛ばされ樣とする硝子窓を、內側から支へながら、狂氣の樣に叫んでゐるではないか。

この時、近時の教室で生徒の看護につとめてゐた教師達は、平素の沈着に似ぬ校長の行動と、氣色ばんだ怒號に近い號令に「何事?」とばかりと校長の側へ駈けよつて來た。

「オイ諸君ッ!あの二階が危險だ、早く講堂へ避難させよ、早くッ!……」

あらしの中の嚴たる命令、聲に應じて池田、內山、渡部、廣の四訓導は、

「ソレッ!」

とばかり、嵐の中を二階建校舍めがけて、手近の東階段さして突進して行つた。がーあゝもうその東階段には、東窓上の採光用の天窓近くが悉く吹き飛ばされてこはれ落ち、山のやうな硝子の破片と土塊で、どうにも上ることが出來ない。一風毎に、校舍はユラ〳〵と搖ぐ……

「西だッ!」

四人はかう云ひ合した樣に叫ぶと、二十五間を一飛びに西の端の階段へ……。

五、あゝ七時三十五分!!!

二階教室では、高等一、二年の女子達が、せんすべもない自然の狂暴にうちのめされた樣に、只蒼白な顏に全身をうちふるはし乍ら、ゴーゴーと惡魔の息のやうに吹きしきる暴風に、うちおのゝいてゐた。

この時——

體操主任にふさはしい運動ズボン姿も凛々しい池田訓導をはじめ、若い四人の男先生が、勢ひ激しくかけ上つて來た。そして四教室へ夫々、

「オイ皆ッー!講堂へ避難するのだッ!早く、早くッ!!」

と命令した。

而しその大聲さへ、あらしの咆哮に消され勝ち……

と、はじめておのが行動の指針を得て我にかへつた樣に、女生徒達は彈かれる樣に立ち上つた。そして身も心も、矢庭に講堂に近い東階段へ……

が——その時第二第三と急迫した肉聲が、暗示にかゝつた樣な女生徒達の頭上にあつた。

「東階段は駄目ッ!危險で降りられぬぞッー安全な西階段へ……早く早くッ!!」

「一人々々では吹き飛ばされる、三人づゝ手を組んで早く〳〵ッ……」

その刹那女生徒達の間には、喜びとも悲しみともつかぬ叫喚が起つた。そして北廊下を西階段へ—

而しあゝ!階段は一擧に四學級二百四十名の生徒を降すべく餘りに狹かつた。

「おすなッー秩序よくッ……」

四人の訓導は、受持の女先生と力を合せて、寸時を爭ふこの危險帶に心せく裡を、かう指揮しつゝそれでも堪へ得ぬ焦心を、階段下でスクラムくんだ三人づゝの生徒團を、嵐の中にかゝへるやうに講堂へつゞく廊下へ〳〵と、珠數送りに送りこんでゆく……。

此時階下教室では、同じ思ひの山本、植村二訓導が、受持の男生徒をかばひ〳〵、階上同樣懸命の働きをつゞけて居た……

かくする中にも嵐は愈々激しくなつてゐつた。

西階段の冒險の避難作業は二分、三分……の短時間に殆んど全部終らうとして、殘る人數は流石に少なくなつた「もう一息だ」池田訓導らの眼はうれしさに輝き尙も殘りの生徒の救出に懸命であつた

この時高一女擔任の伊藤女訓導は、か弱い女の身乍ら最後まで己が階上の教室に殿して、平素から心臓を患つて弱い、後に降り殘された山本賀代子と、長谷川スミ江女二人の手を引つぱる樣に、瓦や石がつぶての樣に飛ぶ階段下へ、辛ふじて降りることが出來たのであるが、あとには未だ三ツのスクラムその六人が殘つて居た。

伊藤訓導は危險の中に叫んだ。

「先生ッ！もうあと六人ッ……」

階段下に二人、始終下りてる生徒を安全の廊下へ運んでゐた廣、渡部の二訓導はこれを聞くと、

「よしッ！」

とばかり階段をかけ上らうとした。が、その時バラ〳〵ッと降りて來る三四人の子供たちの後につゞいて、さつき方から階段の中程で内山訓導と共に、降りてゆく生徒を整理してゐた池田訓導が、その最後の三人と覺しい女子を左右の腋に抱くやうにして、ころぶ樣にかけ降りてくるのを見た。

二人は思はず「ォ、最後の三人！」と叫んだ。その時だつた。

その瞬間!!「ゴーッ!!」と一きは激しい惡魔の呪聲に似たうなりが、巽の方、唯一の空地なる東南の運動場の方に起つたと思ふと、ユラ〳〵と搖れる間もなく、あゝ二階建校舎は、うちのめされ

たやうにどつと地上にたゝき倒された。と、——

「ウワ——ッ！」

と云ふ人の魂を聲にしたやうなうめきと共に、篠つく雨と秒速六十メートルの疾風の裡に、咫尺をわかたぬ砂塵が——埃が——砲煙のやうに、四邊をとぢこめてしまつた。

時に午前七時三十五分!!

それは、この倒壞と同時に、學校全體の激しい振動で、ハタと止つた三つの時計——校長室と職員室と小使室の——が示した悲しい運命の時刻であつたのである。

六、高潮の襲來!!!

これより先、二階建校舎の生徒を講堂へ避難するやう命じた松本校長は、その足で小使室へ引かへすと、オドノ〳〵してゐる女小使に、

「オイツ！火を消せ、火をッ！」

と命令した。

そして、又脱兎のやうに講堂へ飛び込んでいつた。

講堂は避難兒童で充滿してゐた、そして「ザーッ！」と吹く惡魔の一息毎に、講堂は氣味惡く、ゆら〳〵ゆらぐではないか。

「これはいけない、こゝも危險だ。」

そう直感した松本校長は神速果斷――忽ち命令を下した。

「オイ、皆、出るんだッ！外の廣つ場へ！雨なんか何ともない、早くッ！」

そのはげしい下知に、平生慈父のやうに校長を慕つてゐる生徒たちは「これは大變！」とばかり、どつと校庭外の廣つ場さして雨中をかけ出してゆく……

この敏速な行動をニッコリ見送つた校長は、

「サア、火も大丈夫、では畏くも御眞影を……」

と、襟を正して、御眞影室へ向ふとした。

この時北側校舍の方に當つて

「ガーッ！」

と云ふ普ならぬ響きが起つたかと思ふと、忽ちシーンとしてしまつた、外には只吹きつのる風と雨の音のみ苛立つた神經を打つばかり……

「アッ！」

と叫んだ時と、校長が韋駄天のやうに北側二階建校舍の方へ飛んで行つた時と同時であつた。

見るとおゝ、直前、嵐の中に傷ついた巨人の如く立つてゐた學校中唯一の二階建校舍は、あゝ眼の下に見下される低さにまで、ペチャンコにたゝきのめされてゐるではないか。

「……」

茫然自失する間もなかつた。

「子供達は？そして訓導達は？……」

引つゞく急激な心身の激動に、流石の校長も爲すところをしらぬ有樣であつた。

と――この時、沈默の敵は、引つゞき、脚下から冷やかな呪ひの牙をとぎすまして、押しよせてきた、それは校舍倒壞後寸分の暇もない急速な襲擊であつた。

大潮來！

高潮來!!

「おゝ水だ、水だ！」

校長は彈かれたやうに、又も次の擧作へとりかゝつた。

七、噫殉職！　重傷！

この突發的な學校變事を、逸早く外部から認めたのは警察署であつた、折から尼崎警察署では、管下署員の召集を行つてゐた事とて、藤本署長は部下を率ひ風雨の中をまつ先に救援に駈けつけた

阪神電車の操車場からは、多數の係員が馳せつける。

凶報は暴風雨の中を、瞬時にして市内に飛んだ。

父兄、市吏員、消防隊、青年團員等々、忽ちにして集つた多くの人々によつて救援作業は極度の興奮裡にはじまつた。そうした中に、悲痛な松本校長の聲が訴へる樣に聞える。

どうか早く出してやつて下さい、子供を……教員を……」

倒壞校舍の下からは、微かにあらしの中に、

「助けてーッ」

「先生ッ」

と救ひを求めるいぢらしい生徒の聲……

そうする中にも、高潮の高度は次第に上つてゆく。

依然として襲ふ激しい雨風……

「あゝ　あゝ!!この潮、この雨……」

人々は懸命な勞作の中に、思はず長嘆する。

「生徒の多くはこのあたりに　…それに不明の—多分遭難したらしい教員が六名も……」

校長の聲は、はげしいふるえと涙に臺つてゆく……

早く〳〵と引のばす思に、心は矢竹に逸つても、如何せん巨貫の倒壞校舍の取り除けは、そうはか〳〵と捗らない。此時、市議の一色氏は斷乎として叫んだ。

こゝを—この箇所をぶち破らう、そしてたて穴をうがつて中へ這入らう」

「そうだ」

忽ち中央の一局部は、猛然と破壞されはじめた。

この非常手段が奏効して、救援作業はみる〳〵進んでいつた、上からは巨大な校舍、下からは無情の高潮、その間に挾まつて生き乍らの地獄苦をなめさせられ乍ら、どうにもすること出來なかつた生徒達が、續々と救ひ出された。それは誠に天佑の幸運兒であつた。

が—あはれ、一朝の災禍に寸前の生々とした姿に變る、無慚ななきがらとなり、鮮血に染つて運

び出される不幸の兒が、四人六人、四人と悼ましくも十五名に及んだとは……

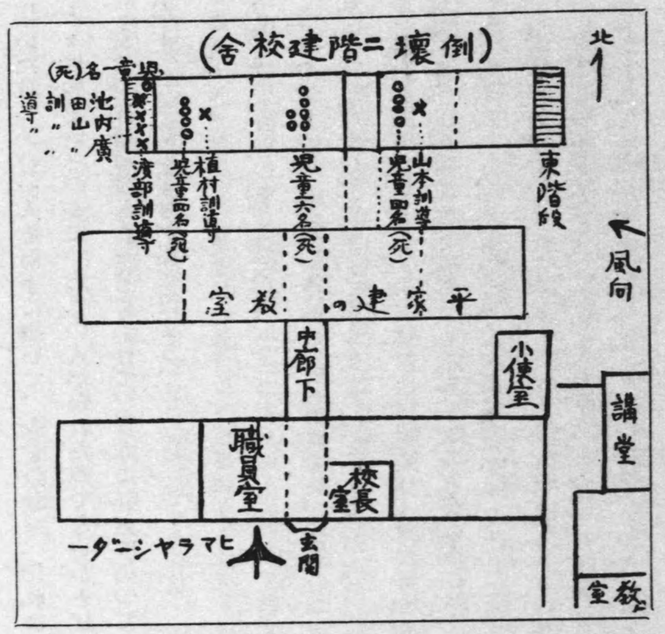
悲喜の兩極、幸と不幸の兩端は、教へ子と運命を共にした六人の教師たちの上にもあつた。

西階段で校舍倒壞の最後の刹那まで、生徒の避難に我を忘れて奮闘した四訓導中、廣、渡部の二訓導は、校舍の下敷になり乍ら、運よくも微傷だに負はず、救援作業によつて危く水難に遭ふ直前救ひ出されるや、直に救援の先達となつて、今の今まで埋まれてゐた箇所を中心に、教へ子たちの救出に憩ふひまもなく立ち働いた。

一方階下教室で最後まで奮闘した二訓導中、理科室に埋められた山本訓導は、あはれにも慘死した四名の生徒の傍に、自分は木と梁の巨木に身を挾まれて身體の自由を失ひ、刻々高まり來る高潮に、迫り來る運命を待つて居たが、運よくも、杉浦市議の手によつて間一髪の裡に救助された。

植村訓導は階下の西端の教室で最後の教へ子二人をかばひ乍ら倒壞校舍の下敷となり、右手を巨木に挾まれて、ぬくことが出來ず、目の前に教へ子の死を直視しながら、身の自由を奪はれた悲しさには、どうにもならず悲痛の涙をしぼつて死の運命を待つて居たが、も辛ふじて救ひ出された。

と訓導は右手前膊をぐだ〳〵に碎かれ全く一手を失ふ重傷にも屈せず、附そふ看護の人々を排して「何アに」とばかり高潮三尺の深さを、只一人町の接骨院へかけつけ、假手當の間ももどかしと



再び學校へかけ歸り、左隻手で最後まで救援作業を手傳つた。その氣丈と、責任感の强さは、つよく人々の心をうたずには居なかつた。

階段下の四勇訓導中、腰推骨折、全身打撲といふ瀕死の重傷を負ふて、今生死の境をさまよひ乍ら病院の重病患者室に臥す內山訓導の、其日の行動こそ鬼神を泣かしめる程のものがあつた雨中の救援作業が進むや、上部の壓迫巨梁を除かれた訓導は、身の重傷も知らぬもの〻如く、

「有難う。」

の一聲と共にガバとはね起き、そばに

傷いた教へ子の一人を兩手に抱いて、急ぎ急救室へ伴れゆかうとした。
人々は物凄いその姿に、幽界の人が現れたのでないかとばかり驚いた。
見よ!!訓導は顏から全身にかけて、眞赤に鮮血に染つてゐるではないか……
が――どうしてそれが出來得よう、
危いッ!」
と誰かゞ叫んで訓導を支へた。
「なアに、大丈夫です。」
と尙も訓導はたつて行かうとする。やつと、それが內山訓導だと知れると、人々は口々に、
「先生ッ……危險です危險です〳〵。それより先生の傷の手當をしなくては……」
と强ひて、訓導を急救室の方へ伴れて行かうとした。
「大丈夫。一人で行きます。あなた方は子供を出してやつて下さい。僕のこの傷位に、人手が入るもんか……」
と氣丈な訓導は、驚く人々の中を只一人、これも亦水深三尺の泥濘と高潮の中を、五六丁もある診療所へ――それも本意なさそうに――出かけていつたのであつた。

內山訓導が救ひ出されて間もなく、その箇所から餘り離れぬ所に、池田訓導が無慚や一人の教へ子と共に慘死してゐるのが發見された。
それは階上から、最後の三人を助けて階段の大方下まで降りた時、遭難したもので、その刹那訓導が三人の生徒を身を以て庇つて死んだことは、訓導と運命を共にした生徒の死體が、訓導の下側右腋に抱かれる樣になつてゐた位置によつて推せられる外、その場に池田訓導に助け出されつゝ遭難して、奇蹟的に助かり、池田訓導の死體發見と同時に、その場から救ひ出された竹村八重子女が涙と共に語つたところによつて明かになつた。
今一人死を以てした訓導の愛の翼に護られて、不幸中に死を免れた負傷兒長原美智子女も、病床にあつて、囈言のやうに「池田先生にすまぬ〳〵。」と繰りかしてゐる。
あゝ!一死以て三兒を救はんとして二兒を助く。涙なくして記されぬ池田訓導至高の愛の最後よ
この至純な訓導殉職の場面をとりまいて、救援の人々は、しばし篠降る雨とあらしの中に、直立瞑目合掌したのであつた。

八、盛大な合同葬

九月二十六日、尼崎市立高等女學校講堂に於て、殉職池田訓導並に慘死十五兒童の合同葬が行はれた。

正面祭壇にづらりと祭られた十六の位牌と在りし日の面影を見て、滿堂の人は、先づ涙を呑む、やがて哀愁こもる衆僧の讀經につれて、場内ははげしい歔欷につゝまれてしまつた。

式進むや松本校長は靜に祭壇に進み涙聲共に下る弔辭を捧げた。

弔　詞

爰に最後の名を呼びて、永久の別れを致さんとするに當り一言君等の英靈に告ぐ。

君等は家庭に於いて孝悌な子供であつた樣に、學校に於ても極めて善良な生徒であつた。當日あの暴風雨を衝いて登校した一事を以てしても、如何に勉强を好み學校を愛したかを知るに十分である。君等は既に六ケ年の基礎教育を終へ、近く實社會に活動すべく、最後の磨きを掛けて居つた時であるだけ、父母の期待も亦大きかつたであらう。不肖始め、職員一同、君等を

立派な日本人に育て上げ、父母の御期待の幾萬分にでも副ひたい一念から、日夜心を碎いて居つたのであるが、事志に反し日常の教養の上には、足らざることのみ徒に多く、殊に今回の災禍に際しては、遂にこの慘狀をすら見るに至つた。

何といふ惡日、何と云ふ憾み多き風であつたであらう!!併しこれ不肖不德の致すところ、其の罪何を以てこれに代へよう、然し君等と志を同じうする多くの友達や後輩は、其の志を繼いで日夜勇猛精進して居る、若しまた過去に怠慢あらば、君等の犧牲に楔機を得て、斷然更生し眞に全校一致君等の貴い犧牲に報いんと誓つて居ります、若き英靈よ永久に瞑せられよ。

訓導池田敬止君の靈に對し、先づ告げたきことは、君が日頃愛育したりし六十六名の兒童中には、一名の死者なく、君が最後に抱きたる二名の兒童すら、不思議にも生存せることである君が暴風雨中危險に頼したる校舍に入り、不安に戰く兒童を救ひ出さんとしたる時、君の心には天もなく地もなく、家なく自己なく、唯兒童を助けたいの一念ありしのみ、幸に君の一念は屆いた、其の努力の空しからざりしを知られたならば、君は死して憾みないであらう。

君が彼の時に於ける純一無雜の愛は、君が平素教壇に立つ時、否教育者として世に處するの間、常に教師の教へ子に對する、貴き教育愛として、君の腦裡を離れなかつたに相違ない、近

時世は物質の價値を過大視し、己れを利するに急にして、献身犠牲を以つて迂愚と見る者多く教育界亦學術を修むるに、その才幹を磨くに努むるもの必ずしも少しとせざるも、愛情と熱意とを抱く眞の教育者の、漸次減少するにあらざるか、かゝる時、君の嵩高なる行によりて、教育界の尚未だ朽ちざることを示された。

君の犠牲は眞に貴き犠牲であつた、後に遺されし御遺族は、朝な夕な君の温顔に接することを得ざるを、悲しまるゝ事であらうが、名門の出である君が、祖先の名を恥かしめざる行と、教育者として最も美しき殉職の最後とを思はれて、必ず慰められるゝことゝ信ずる。

噫!!君は肉體的には短き一生であつた、然し其の精神は永久に死せず、我等亦君の精神を心として、兒童の教育に努め、君の貴き犠牲に報いんことを誓ひ、茲に君の瞑福を祈る次第である。

最後に、今は亡き十五名の教へ子一同の爲に、盛大なる市主催合同葬儀をお擧げ下さつた市當局、本日御參列の各位並びに多大の御同情を戴いた一般市民諸賢に對し、職員一同を代表して、深甚なる感謝の意を表する次第であります。

聊か述べて弔詞といたします。

この眞情流露の校長の弔辭に、感極まり場内のすゝり泣きは、はげしい號泣となり、しばしが程は、滿場悲愁の極爲すところを知らぬ有樣であつた。今悲しき數に入つた人々の名を錄して、文字の碑とする。

訓導	住所	保護者
池田敬止	別府村一〇六ノ一	正治
兒童		
池田正夫	東初島一三一	三吉
山本賀代子	中大物町一八	伊太郎
橋本紀一	小島北ノ町一	來松
山口勇	金樂寺西福	正雄
平林正輝	中在家町一ノ二二	吉藏
松田健	東難波六ノ三五	松治
波戸庸三	東町中通三丁目一三	

前田義輝	杭瀬堂後一ノ一	義光
京見幸吉	東初島町一五八	安吉
藤田通夫	東町中通一丁目一七	文吉
佐野甲夫	東難波中新開六五六	伊之助
森　肇	西本町北通五丁目一六四	一郎
難波弘治	東町北濱四ノ一一三	楠治
福島定雄	西本町七丁目二八四	幸治
葉狩保範	東難波八八三ノ三	常三郎

第五章　阪根治三郎校長の殉職

——京都府八幡尋常高等小學校——

一、あゝ！　悼ましきこの慘禍損傷!!

こゝ山城の國男山に鎭座まします岩清水八幡宮の靈域近く、神の護りに古き歴史を誇る八幡尋常高等小學校がある。

綠の田野の中に廣大な校地を占め、十分のゆとりをとつて建てられた巨大な校舍の威嚴!!わけても昨春落成式をあげた許りの、十敎室を有する堂々たる南側二階建校舍は、その中に一きは四邊を拂つて見えた。

在籍一千三百、これを高等四、尋常二十四、都合二十八學級に編成、二十九の敎職員が、孜々として育英訓化の事に當つてゐるのであるが、九月二十一日朝、彼の狂颱風のすぎるところ、此の校亦免れず、八幡宮の神威をなみする暴威は瞬時にしてなされたのであつた

即ち學校中最新の、代表的建築物たる南二階建校舍は—假令それが京都市東山區安井小學校より移轉改造のものであつたにせよ—魔風の爲に一たまりもなく倒壞粉碎し、二百數十名の生徒は逃げ

〔從侍松久の察視校幡八の禍災〕

る間もなくその下敷となり、中、六年生十三名四年生十二名、二年生七名、都合三十二名といふ多數の兒童慘死の厄に遭ひ、外に二十七名の重傷者、八十名近い輕傷者を出すの慘禍を見たのである。

この時阪根治三郎校長は、南校舍階段にあつて、率先生徒の救助につとめ中、倒壞校舍の爲に非壯な壓死殉職を遂げ、同じく奮闘中の櫻井利次訓導は脊椎骨折、衣川八重子訓導は骨盤裂傷の何れも再び立つ能はざる程の瀕死の重傷を負ふて倒れ、其他安井信喜訓導は左下腿裂傷、安達憲二郎訓導は肩部打撲傷、奈古幸善訓導は胞部腰部打撲傷を夫々被るの學校中最重最惡の凶變であつた。誠に悼みて

も餘りある悲痛事とせねばならぬ。

二、校舍倒壞の前後

この日、早朝から篠つく樣な强雨であつた。

その中を生徒達は、元氣よく登校して來た。

家庭の事情から、着任以來ずつと單身任地にあつて校下に近い娘夫妻の家に寄寓してゐた阪根校長は、一人身の氣輕さと、人一倍學校を思ふ忠實な念慮から、いつもの樣に早くから登校し、何くれとなく校務をとつてゐた。その中にも段々と時は移り、始業時間前半時間といふ午前八時ごろ—今までの强雨は、急にはげしい風をよんで、俄に校の內外がざはめき出した。

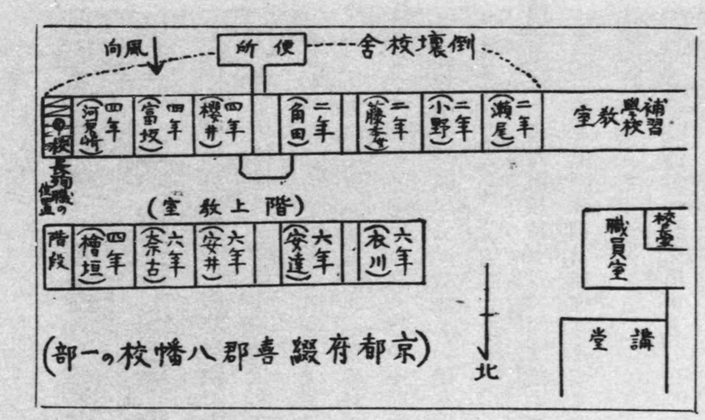
「おゝ、烈風が伴ふたな…」

校長室にあつた阪根校長は、目を通してゐた書類から眼を離して、硝子戶越しに南側校舍を見た。

その中にも風雨は刻々ひどくなつてゆき、窓へ吹きつける雨風の音は、物凄いうなりを立てる—

校長はツト立ち上つた。

そして隣の職員室へ顏を出すと、



「宮部君、宮部君は？」

と首席をよんだ。

が、その時宮部首席はまだ登校してゐなかつた。職員室の訓導達は一せいに目禮した。

「見えぬな、……よし、では諸君！大分ひどい風が出たやうだから、めい〳〵の教室に行つて、生徒を見てやつて下さい。この調子では、硝子窓などが危險だと思ふから……」

職員達は、うなづきつゝ立上つた。そして、即座に夫々受持教室へ急いで出ていつた。

校長室へかへつた校長は、フト思ひ出した樣に、風雨が叩きつける硝子窓ごしに、斜に男山岩清水八幡宮の方を見た。

と——

神域一帶に鬱蒼と繁つてゐる千古の巨松が、まるで竹籤の竹が撓むやうに吹かれてゐるではないか。瞬間校長の眉はピリッと動いた。

「これはいけない、この風は普事でないぞ、愚圖々々しては居られぬ、早く子供たちを學校内の安全地帶へ——そうだ講堂へ避難させよう！」

そう決意した校長は、今度は血相かへて職員室へ飛び出した。がその時もう職員室には人影もなかつた。

「そうだ小使に、避難をふれ廻らせよう」

校長は小使室へかけつけた。が小使室にも人影が無かつた。

見ると爐に火が——

「あゝ危い、オイ、誰も居らぬのか、……」

返事のないのは、何かの用事に出拂つてゐる爲と讀まれた。

校長は矢庭にそこの水溜につかつた樋杓を採ると、ザブ〳〵と三四杯つゞけさまに注いで、火を消すと、

「そうだ、非常サイレンで——」

と獨り言して小使室を駈け出した。風雨はいよ〳〵はげしくなつてゆく、忽ち非常を傳へるサイレンが、外のあらしに交つてけたゝましく校内に響き渡つた。校内は急に騷がしくなつてゆく……

何事ならんと職員室近くの教室からは三四の訓導が慌しく職員室へ——校長室へ——そしてサイレン裝置の場所へかけつけて來る……

「避難だ、避難だ、風は巽よりだから南校舍の者全部講堂へ——」

そう叫ぶと校長は自分で眞先に風雨の中を南校舍の方へ飛んで行つた。

外は又、思ひの外すさまじい風……飛ぶ、飛ぶ、砂塵に瓦石！…あらゆるものが、校庭と云はず校舍壁といはず、手當り次第に叩きつけられる。

ともすれば自分自體さへ、吹き飛ばされそう……

忽ちづぶ濡れになり、飛び散る瓦石に打たれて手首に血さへにじませた校長は、辛ふじて南校舍まで行つた。そして、駈け乍ら

「オーイ、早く講堂へ避難せよ、早く」

と階下の五教室をよびまはると、矢庭に階段を上へかけ上つた。

教室内では、嵐の中に無氣味にひびいたさつきのサイレンに、何等かの凶變を暗示された樣に、

擔任も兒童も募る不安におの〳いてゐたが、まさかこの新築の頑丈な校舍が倒れるなど、ほとんど夢想だにせぬ事とて、只、そうした際の、子供たちの騷擾と浮動とを鎭めて、室内の危險防備にだけ氣をくばつて居た十教室では、危急を告げる校長の、怒鳴るやうな切ぱつまつた慌しいふれ歩きの命令を外に聞いて、

「さては？」

とばかり

「ソレッ！」

と一齊に前後の出入口をひらくとどつと廊下へ飛び出した。

「講堂だよ！講堂!!」

はげしい風雨の中に校長の聲が、きれ〴〵乍ら、悲壯に聞えてくる。つゞいて各擔任訓導の聲で、あちらこちらに、

「早くせ、早くせッ!!……」

「一人ぢや吹き飛ばされるぞッ……組みを作れ三四人づゝ……」

など危急の際にも手の屆くやうな指導の聲が、悲壯にひゞく。「ドドドドッ」と階段を下る階上の子供

「危いぞッ、倒れるなッ！」

「なるべく廊下に沿ふて行くんだぞッ！」

そうした指揮の中に「ハイ、ハイ」と答へる可憐な生徒の聲、中には子供心の無邪氣さに、途中に忘れものを思ひ出して、己が教室へ引かへしてゆく者もある……

「オイ、何をしてゐるんだ。危い危い！早くせんか早く……」

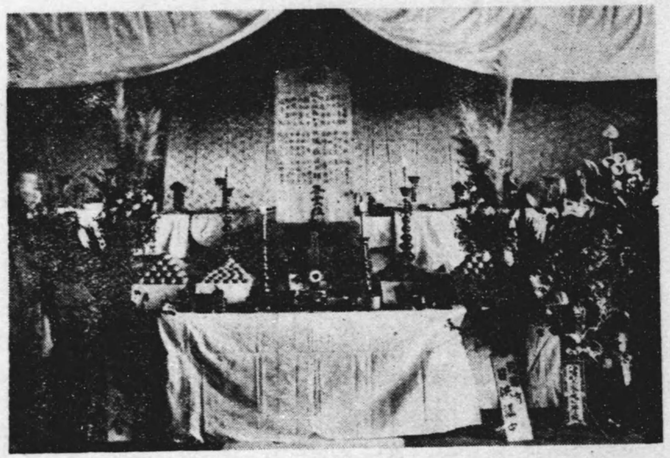
常平生に似ぬ受持先生方の怒號に、生徒たちは只オド〳〵と不安の心に、バタ〳〵と人々のゆく方へ機械的に動いてゆく……

かくて八時十分、階上階下合せて十教室六百名に近いさしもの多數兒童も、その大半が避難行動を終り、二百名ほどがいまや廊下を講堂へ移らうとし、殘り僅かゞ階段を下りきらうとする時!!

「ビューッ！」

と吹きつけた眞南よりの魔の突風に、八幡校唯一の二階建教室、その磐石をほこつた南新校舎は、地ひびきうつて倒壊したのであつた。

最後まで階段に頑張つて、階上教室から降りて來る生徒の避難を助けてゐた阪根校長が、悼ましい壓死體となつて、その姿態にまでマザ〳〵と教へ子を助け下す最後までの一念を殘して發見され



殉職阪根校長並に罹災兒童の町葬

た時、在任三年、平生の校長を知つてゐる父兄たちは並居る職員達と共に、思はず聲をあげて泣いた。

あゝ、悲壯な阪根校長愛の殉職!!

三、腸を斷つ吊葬儀

九月二十三日早朝から、慘禍の學校内、魂のぬけたやうな講堂内で、悼ましい颱風の犠牲阪根校長初め三十三兒童の町葬がとり行はれた。參集の遺難遺族、父兄、町家の人々、誰一人として正面に安置された三十三の小さい位牌に面を向け得るものとてなく、限りない悲愁が鉛のやうに重くるしく四邊を包んだ中を、しめやかな導師の讀經が始まり、町はじまつて以來の悲しい吊葬儀は、涙を以て終始された。

中にも可憐な生徒代表が、三日前まで共に樂しく手

を執つて學びし三十二名の學友と、三年間父と敬し母と慕ひし校長先生の靈に捧げた、眞心こもる弔文には、すべての人々が聲をあげて泣いた。

嗚呼！

弔辭

九月二十一日!!

何と言ふ恐ろしい日だつたでせう！

何と言ふ悲しい日だつたでせう。

私達は朝からの激しい雨風に不安を感じながらも、勉强のある日だと思つて、勇氣を出し、上級生は下級生を助け、下級生は上級生を賴り、手と手をつなぎ合つて、激しい暴風から身を讓りつゝ、學校へと上りました。

所が風雨はいよ〳〵强くなるばかり、見る見る中に校庭の木はなぎ倒され、木の葉は小石の如く飛び來つて窓硝子を破り、皆々どうなることかと、廊下を此方彼方と走り廻つて騷ぐばかりでした。其の中を校長先生はじめ、諸先生方は聲を限りに、「危いから早く講堂に集れ」と叫

ばれ、其の指圖に、無我夢中で講堂へ駈け集りました。其の瞬間、あの大きかつた新校舍が、恐ろしい響を立てゝ倒れ、校長先生や大勢の友達は、その下敷となつてしまわれました。さうして到頭校長先生と三十二名のお友達は、可哀想に其の爲に慘死されまして、今日こゝに、其の御魂をお弔せねばならぬ悲しいことになつてしまひました。

あゝ何と言ふ不幸なことでせう。

校長先生は何時もにこ〳〵として非常におやさしく、私達を本當に可愛がつて下さいました併し最早今日からは、教室にも運動場にも、學校中の何處にも、校長先生のお顏を拜むことが出來ません。又あの毎日の朝會での號令や、立派なお話を、再び聞くことが出來ません。と思ひますと、悲しくて泣けて來るばかりです。あの御立派な御姿にもう一度接したい。あのおやさしい御言葉をもう一度お聞きしたい。併しそれは永久に出來ません。

私達はお父さんを失つた心地がして、淋しくてたまりません。併し校長先生の御魂は、天にゐまして、何時までも私達を護つて下さるでせう。

私達は、御自分の體を捨てゝ、ひたすら私達を救つて下さつた校長先生の御恩を忘れず、日頃の御教を心に留めて、きつと〳〵立派な日本國民となつて、御國の爲に盡します。そしたら

校長先生喜んで下さい。

次ぎに悲しくも亡くなられた、三十二名のお友達に申します。不思議な運命に支配されて、皆さんと昨日までは、同じ此の學校に來て、共に學び、共に遊んだのでした。

運動會の時の白いシャツ、パンツの勇ましい姿、遠足、旅行の時のリュクサックを持つた嬉しさうな姿が目の前に浮んで來ます。長い夏休み中に製作した圖畫、手工、書方の展覽會を、喜んで熱心に見たことも、今は悲しい思ひ出の一つとなつてしまひました。

こんなことを、次ぎから次ぎへと思ひ浮べて來ますと、悲しさが、いよ〳〵強く胸一杯にこみあげて來て、もう言葉がありません。

私達一同は、今後皆さんの分と一緒に、一層勉强にきばつて、よき生徒となり八幡校の名をあげ、非常時日本をせおつて立つ決心であります。どうか安心して、お眠り下さい。

こゝにいよ〳〵懐かしい校長先生、親しかつたお友達と、永久のお別れとなつて此の弔の祭場において、落つるは只涙ばかりであります。

では左様なら。

昭和九年九月廿三日

京都府綴喜郡八幡 高等尋常 小學校

生徒總代　家　村　耕　造

四、死後の光榮

京都府では、阪根校長が身を挺して職に殉じた悲壯な最後に對し、二十一日附を以て、小學校令施行規則第百四十九條により、特に功勞あるものとして、現俸二級俸から、一躍特別俸二百拾五圓に昇增の辭令を發して、その行を賞した。

又畏くも　聖旨を奉じて、京都、大阪、兵庫の三府縣の災害を巡視の久松侍從には、二十四日府知事の案内にて、八幡校に立寄られ、親しくその校舍倒壞の慘害跡を視察され、有難き御言葉をさへ賜つたのであつた。

阪根校長亦以て瞑すべきか。

第六章　栗山優訓導の殉職

——堺市三寶尋常小學校——

一、颱風來！　津波來!!!

二十一日の朝、近畿一帶を襲ふた魔の突風は、海岸近い低地帶に位置する堺市三寶町七丁目の三寶小學校を吹き飛ばさん許りの勢でふきつけた。

全校十九名の職員は、素破ッ！とばかり、校長指揮の下に、校内切つての安全地帶である講堂を避難場所と決定、夫々敏速な受持生徒の避難行動に移つた。

中にも六年受持の栗山訓導は、最上學年擔任者として、將又常日頃の仁俠の氣魄から、逸早く擔任の生徒を講堂へ避難させ終るや、そうした急迫した不時の出來事に、ウロ〳〵として泣き叫ぶ幼學年級や、女訓導組の生徒の避難を、あれこれと手助けし乍ら、はげしい風雨の中を懸命にかけまはつてゐた。

と、此時ガタ〳〵と烈風毎に氣味惡く搖れる校舍の一角から、人の魂をさすやうな物凄い叫び聲が起つた。

「津波だッ！」

「大津波だよ！ッ!!」

その叫び聲に、さつき方からの掌てないはげしい雨風につづく、慌しい講堂避難に、只さへ驚きと不安にたましいも身にそはず、ブル〳〵と打ちふるえてゐる小さい子供達は、堰をきつた樣に、

「ワーッ！」

と一度に泣き出した。

「津波!!」

流石に職員の面々も驚いた。そして一齊に海の方を見た。

そこへ脫兎のやうに、使丁の一人が飛んできた。

「先生ッ!!アレ〳〵、大津波でがす、大津波……」

その血相かへ、息も吐切れ〳〵に云ひ〳〵指す方を見れば、

オヽ何たる物凄さぞ!!

西の方遙か、無氣味に黑づんだ海づらからは、見る目にもハッキリと高くもり上つた大津波の第一陣が、音もなく、三寶濱目さして押し寄せてくるではないか。

「オ、、まこと津波だ。」
流石に職員達も、この思はぬ妖魔の襲撃には、どうするかに迷ふことしばし——
「あ、、あ、!三寶堤が切れたら、こゝら一面泥の海だッ!!」
使丁は絶望のやうに叫ぶと氣が觸れたやうに小使室へかけこんでいつた。
その聲に彈き返されたやうに、栗山訓導は猛然として立つた。
「そうだッ!生徒を淺香山新道から逃すんだ、新道からッ!!」
そして、飛鳥のやうに講堂の方へ駈け出した。つゞひて他の職員達も……
此時講堂内は、まるで蜂の巣をつゝいた樣な騷ぎであつた。泣聲 叫喚 怒號!!
外は呼吸も出來ぬやうな疾風、强雨!!
栗山訓導は、つか〳〵とましらの樣に講堂の壇上に立ち上りさま、兩手をひろげて大聲叱呼した。
「サア皆靜まれッ!そして一寸も早く先生の云ふ通りになるんだ。わかつたかッ!!」
雷のやうな大聲叱呼に、流石の講堂内もその瞬間急に靜まつた。
「よろしい— 今から力一ぱいの早さで、新道へ逃げ出すんだぞ、早くせんと、津波にのまれる。
だが決して心配はいらん、先生がついてゐるぞッ!」

そして己が受持の六年の居る方を向くと、
「オイ栗山學級の者は、俺につづけッ!!」
と命令してヒラリと壇を下り、疾風强雨の中へ飛び出した。と急に元氣をとりもどした生徒達も我後れじと訓導の後についてゆく……
かくて教室から講堂へ—そして今度は講堂から新道上へ—敏速な避難行動は開始されたのであつた。
この間ほんの僅かの時間であつた。

二、あゝ 波浪と鬪ふ俠訓導!

栗山訓導の力强い誘導暗示に、全學級五十名は、驚くべき敏速さで、學校からほど近い三寶淺香線新道上に出た。
沖の方からは、大津波のうねりがもう眞近に迫つて來てゐる……
流石に栗山訓導の顏は、まつ蒼であつた。
訓導はこの切ぱつまつた危急を救ふ唯一の方法として、眞劍にうちふるえる聲で命令した。

「サア、お前達は此の道を、眞すぐに東へ力一ぱい—死ぬるつもりで走れ!! い〻か?決して自分の家へなんか寄つちやならんぞッ!わかつたな!!では行けッ!」

そう云つて、屹と右手をあげ遠く東方の高臺を指す栗山訓導は、嵐の中に絶對の權威者の如く神々しく見えた。

「ハイ」

と答へて生徒達は、一散に新道をかけてゆく……

後見送つてニッコリした訓導は、息つく間もなく又、疾風のやうに學校へとつてかへした。

「オイ、早く早くッ!こちらから逃げるんだ、皆ついて來た〳〵」

雨に濡れた長髪をふり亂して、訓導は又しても次の六七十名を引率して新道上へ ……

續いて又學校へ……

かうして精魂のつゞくかぎり、體力のあり丈けを傾けて、兒童の避難に努めた訓導が、三度目のそれを終へ、四度目に學校へ引返した時!

あゝ、津波はどつと殺到したのであつた。

「水だ 水だッ!」

「キャーッ!」

「助けてッ!!」

學校内は忽ち修羅の巷と化した。

その間を各受持の教師たちが、懸命になつて避難と救助にかけまはる……

「なあに、これしきの水がッ!……」

日頃水練の達人として、十分の自信を持つ栗山訓導は、刻々その高度を増してゆく高潮の中を、引つぎ〳〵兒童を新道へ、抱いてゆき引つぱつてゆきして、救助につとめつゞけた。無情な水はその中に、二尺、三尺、四尺と増してゆき、も早どしても歩くことが出來なくなつてくる……

「チェッ!殘念だッ!」

かう叫んだ訓導は、さつき方からの奮闘で裂け崩れ、ぐじよ〳〵濡れたズボンとシャツを、引き破るやうに素早く新道上に脱ぎ捨て〻素つ裸となつた。

そして、その時はもう一面の泥海と變じた學校へ、殘りの生徒を助けに、鮮かな「早や抜手」を切つて、引かへしていつた。

浮御堂の樣になつた學校には、流石にもうその時、殘された子供達は少なかつた。

否あつたとしても、それら不幸の子は、もう其の時、風魔か水魔の爲に、あたら若く希み多き生命を奪られてゐたことであらう――!!

「何處に?殘された子供が?」

と訓導の眼は、はげしく八方に注がれる……

と――

遙か向ふ、講堂側の窓にしかとつかまり、餘りの恐ろしさに、もう聲さへ出し得ぬ子供の三四人が刻々迫る來る死の運命を待つてゐる樣に、あゝいでゐるではないか……!!

「アッ!居た居た。ォーイ!しつかりせい、大丈夫だ、大丈夫々々々。」

泳ぎ近づき乍ら、訓導はかう激勵の聲をかけた。

この思ひもよらぬ水上からの救ひの聲に、絶望のどん底につき落されて居た可愛想な生徒達は、急に蘇つたやうに、聲する方をふり向き、颯爽と拔手をきつて、こちらへ泳ぎ寄つてくる訓導の、雄々しい姿を認めると、活き〳〵と眼輝かし乍ら、胸一ぱいのよろこびを聲にして、

「先生ーッ!」

「先生ッ!!」

「栗山先生だッ!」

と叫んだ。

「大丈夫だ。安心せい。」

早やそこへ泳ぎついた訓導は、かう云ふが早いか、その中の二人に左手さしのべると、

「しつかとこの手と肩につかまつてゐるんだ。いゝか、外の者は一寸待つて居れ、すぐ引かへして來る!!」

と云ひ殘すと、右片手泳ぎでやす〳〵と、二人の生徒を高みの新道の方へ……

そして又學校へ……

が、この時さしもに頑丈に築かれた三寶堤も決潰しつくしたか、高潮は變じて激流となり、氣味惡い混濁の流れは、見る〳〵八尺九尺の深さとなり、その邊一帶恐ろしい狀況を呈してきた。訓導はこの時まで新道にあつて、ハラ〳〵と殘りの敎へ子を氣遣ふてゐる同僚二三人に向つて、凛然と

「殿りは僕が引受けた。君等は早く子供等を助けて避難して呉れ給へッ!」

と叫ぶが早いか、又してもどつと激流へ拔手をきつて躍りこんだ……

が、さつきからの息をもつかぬ連續の激動に、全身は綿の樣に疲れきつてゐる、それにもうこの

時、丈餘に達した潮の激流は、訓導の泳ぎを妨げて、目前の、――殘る最後の生徒が只管に訓導の救ひの手を待つ學校へも、仲々容易に進めなかつた。

「何をッ！」

殘る最後の力をしぼつて、訓導は激流に逆らひ〳〵泳いでゆき、やつとの思ひで、最後の子達のところまで泳ぎつくことが出來た。

その時！

その生徒達は、どんなによろこんだ事か!!遂に救はれたよろこびと、安心に輝くその面上に、無常の雨風が、容赦なく横なぐりに吹きつける……

「しつかとつかまるんだ、よいか、大丈夫だッ！」

亂れた濡れ髪を、無雜作に右手でかき上げると、訓導は殘んの勇氣一ぱい、救ひの渡し場なる新道さして引かへした。

かうして、人間業と思はれぬ栗山訓導の、水上救助の貴い勞作が、幸運の最後の教へ子二つの肉體を、新道上に運び上げた時、猛く若き仁俠の訓導の肉體は、極度の疲勞困憊と、張りつめた心の弛みとに、巨木が倒れるやうに、撞とそこへ横倒れに倒れてしまつた。

この時――

あらしの中、水に包まれた學校の方と覺しく、かすかに―而し玉ぎる樣な――救ひを求める聲が、はつきり聞えた。

「助けて―ッ」

その聲に彈かれた樣に起き上つた訓導は、屹と、今し來た學校の方を注視してゐたが、

「まだ居るな、よ―し……」

と叫ぶが早いか、又してもザンブと激流の中へ身を躍らせた……

が――

あゝ、栗山訓導のあの救ひの神の樣な肉體は、あの濡れ亂れた長髪の頭は、再び激流の彼方に現れなかつたのである。

おゝ、悲壯崇高なその最後よ！　噫!!

三、慕ひよる教へ子の涙！

栗山訓導激流に呑まれ行方不明―この凶報は、風水禍に混亂する堺市三寶界隈に、パッと傳播され

た。三寶校の父兄達は電撃に打たれたやうに驚いた。わけても栗山訓導の超人的奮闘によつて、危いところを救ひ出された多數の生徒達の、驚きと悲しみは、傍の見る目も悼ましいものであつた。

「あの栗山先生が亡くなられた。」

「水泳上手のあの先生が……？」

「私たちを、最後まで助け護つて下さつた栗山先生が……」

生徒達は、我が家がつぶされたのも倒れたのも、忘れたかの樣に、寄ると觸ると訓導のことを悲しみ悼むのであつた。

忽ち屍體の捜索陣は張られた。父兄團、青年團、在郷軍人救護團を初め、安立町青物組合まで參加して、學校を中心に、暴風雨と大津波に蹂躙しつくされ、見るも無慚にいためつくされた三寶濱堤防跡あたりから、三寶、出島方面に亘つて、殘る隈なく捜しに探したが、當の訓導の死體は、二十二日も三日にも發見されなかつた。

市の捜索本部へは、恩師の上を案じ煩ふ可憐な敎へ子たちが、引きりなしに尋ねて來ては、

「まだ先生は見つかりませんか」

「栗山先生はわかりましたか」

とたゞし、まだ屍體が發見されぬと聞かされて、ぐつたりとなつて引とるさま、はたの見る目もいたゝしく、

「どうしても早く捜し出さねば……」と係諸團體は、いよ〳〵懸命に之が捜索をつゞけていつた。

× × ×

かくて、二十四、五、六日も空しくすぎたが、二十七日の朝十時ごろに至つて、あらゆる方面へ殘る隅なく捜索の手をのばした甲斐あつて、學校から小六丁も東の山手に當る山本通三丁目の大石米屋跡の廢屋の床下に、泥にまみれ死の最後まで兩手に敎へ子をしつかと抱きかゝえ奮闘しつゞけた悲壯な姿態の訓導が發見された。

と、忽ち

「栗山先生が見つかつた。」

「先生の屍體が發見された。」

と敎へ子たちは、どつとそこへかけつけ、あまりにも悼ましく、變りはてた先生の姿を見て、よゝと聲をあげ相抱ひて泣きくづれた。

軈て訓導の屍體は、思ひ出の三寶校——今はあらしと津波の挾撃に、見るかげもない廢墟と變つ

てゐる—に運ばれ、遺族をはじめ、職員やいたいけな敎へ子の涙につくまれつゝ、悲しい通夜の一夜を明したのであつた。

四、身を殺して仁をなすもの

二十九日午後一時半から、廢墟のやうになつた三寶小學校々舍の一部に於て、栗山訓導を初め、遭難兒童五十五名、並に三寶方面の慘死者三百五十餘名の靈を慰める追悼法要が盛大に營まれた。

集まる者遺族を初め無慮一千、市內各宗寺院僧侶百餘名の讀經裡、河盛堺市長、池永三寶小學校長等の吊辭あり、綿々として盡きざる哀愁裡に式を終へた。

わけても栗山久枝未亡人が、中央祭壇に祀られて今は亡き訓導の形見の寫眞に、涙の燒香を手向けた時には、滿場齋しくすゝり泣いた。

あゝ君こそ身を殺して仁をなすもの、以て敎育者の龜鑑とするに足る。

噫!!

第七章　吉岡藤子訓導　横山仁和子訓導の殉職

……大阪府豐能郡豐津小學校……

一、中央校舍倒壞の前後

九月二十一日朝七時半。

夜來の雨は未だ止まず、風をさへ伴ふて、激しく降りしきつてゐる。

がこの時分、まだそれがさまでひどくなかつた證據には、尋常一年さへ、みな傘をさして登校して來た一事で知られた。

が七時四十分ごろから、風がめだつて激しくなつて來た。八時始業であるので、その頃にはもう職員も兒童も大方登校してゐた。

——只、廣い職員室の中央部に設けられた校長席に、河崎校長の姿がいつ迄も見えぬのが、思ひなしか一種の不安と物淋しさを思はせた。

が、そうした氣分も束の間、登校の職員達はそれ〴〵受持の敎室へ、始業時前の敎授準備をかね

て、かうした際に起る不慮の過誤の豫防管理に出かけて行つたのであつた。

この頃風は、南東の方からU字形に圍はれた二階建中校央舍を目標か何かの樣に、雨を伴ふてビュウ〳〵と吹きつけてゐた。

この中央校舍には、階上に五年男子組、四年女子組が各一組、横山訓導擔任の三年ロ組と、石橋訓導受持の三年イ組の都合四ケ學級、階下には、四年男子組と、一年女子の吉岡訓導組、藤田訓導擔任の一年男子組の三ケ學級が收容されてゐた。

七時四十三分ごろ——

南東より吹きつけてゐた暴風は、次第にその方向を南に轉じだした。

U字形の校舍配置上、自然風をはらんで、當りの一番激しい中校舍では、餘りにひどい風雨におそれおのゝき、立ち騷ぐ子等をかゝへて、階上でも階下でも、心は同じ各擔任訓導が、

「早く何とかしなければ……」

「早くどこかへ避難させなくては……」

と刻々に募る不安と焦慮に、只管に學校長からの指圖と命令を待つてゐた——その間の長く感ぜられた事。

が、いつまでも〳〵校長からは、何の指圖も來ない——來ないも道理、この時になつてもまだ河崎校長は登校してゐなかつたのである。

外にはビューツ！ビューツ!!と吹き募る雨風、瓦の落ち散る音、吹きつける砂塵のつぶて！今にも破れるかと思はれる硝子窓の音、そうした中に遠雷の樣に轟く底氣味惡いゴー〳〵といふ惡魔の咆哮!!

「これはもう我慢しては居られない！一刻も早く新建ちの本館へ……」

教へ子の上を思ふ一念から、遂にしびれを切らした各擔任は、オド〳〵と訴へる樣に、

「先生こはい！」

「先生、先生。」

とからまりつく子等に、

「では逃げ出しませうね、騷がないで……」

と流石につのる不安に蒼ざめた面を向けて廊下へ……

わけても此月初めに轉任して來たばかりの横山女訓導は、そうした處置についてまるで不案内である不安と焦慮から、つひ堪まりかねて隣りの石橋先先に、「樣子を……」と出かける時、どや〳〵

と階段を下りてゆくイ組の生徒、つゞいて特徴ある石橋先生の聲で、
「あはてるなッ！階段は特に氣をつけてッ！……」
それは正しく非常時の避難行動!!
「それぢや……」
と横山女訓導も、急いで受持の子達に云つた。
「皆さん、早くこゝを出ませう、そして本館へ逃げるのです。こゝはほんとに危い……」
その聲に小さい子達は、ほんたうに空恐ろしくなつた心を、
「先生——ッ！」
とばかり、訓導のぐるりへ集つて來た。
「さア、早く〳〵……階段でころばぬ樣にね……」
と親どりひよこは、からまりからまられつゝ一途に階段を下へ……
この時、階下教室では、同じ思ひの吉岡女訓導と、藤田訓導とが、學校最年少の子達の親として一しほその處置について案じ煩つてゐた。
と、此時慌しく「ドドドドッ！」と東階段をかけ降りる音！

「さては避難……？」
とピンと、ひゞいた兩訓導は、
「避難とすれば、この一年生のこと、どうすることが、一番安全で有効なのか……？」
と突嗟の中にも有難い親心。が愚圖々々しては居られなかつた。
「サア、皆さん、出ませう、こゝはおつかないからネ……わかつて？」
子達は可憐にうなづく。
「では、先生と一緒にゐらつしやい、先生のとほりついて來るのですよ……」
と、訓導を中心に、小さい一團は今し教室を廊下へ、そして北なる本館へ向はうとした一刹那!!
眞南から「ゴーッ！」吹きつけた魔の突風!!「アッ！」と云ふ間もなく、中の校舎は轟然地ひゞき打つて、投げつけるやうに倒壞したのであつた。

二、三教員の活躍！

この時、六年男の山口訓導は、北側本館校舎の階上教室に居た。
と——南側にあたつて、

「サツ!!」
と閃光の様なひらめき。つゞいてパツと急にそこら一帶が明るくなつた様に感じた。
それは全くハツとした一瞬間であつた。
その時、訓導の耳をつく僅かの音もなく、響もなく、叫喚もなかつた——夢からさめた様に、フト南を見ると、最前まで新館よりも高く建つてゐた南校舍が無い——?
訓導の顏色はさつと變つた。
心なしか、吹つける風の當りが急に激しくなつて來た様、
「これは大變だ。今度は本館もやられるぞツ!」
訓導は「ソレツ!下へ。」と兒童に避難を命じた。
流石は六年の男子、命令一下敏捷に中央階段を下へ、そして北側校門外の道路へ……續いて六年女子、高等一年二年の生徒も同様に——が、道路へ出て西へ向つた生徒が、何に怖れてか、はげしい風雨の中に立ちすくんでしまつた。
「オイツ!西の村へ行くんだ、早く〳〵ッ」
山口訓導は一刻を爭ふ危急の場合と、かう怒號しながら、疾風の様に先頭の方へかけていつた。

と、あゝ!何たる事ぞ。
本館校舍の建物を境に、西側の空所へは、多分講堂、雨天體操場からのであらう、瓦が、土が、砂が、木片が、板が、あらゆるものが、ビユウ〳〵と流れの様に飛んで來て、とてもすごい狀景ではないか。
餘りの事に訓導も思はず口をつむぐ。が本館倒壞の危險は、こゝに風雨の中に、瓦石の飛散におそれて道にうづくまつてゐるよりも尙更にひどい。
本館が北側へ吹き倒されなば、一ケ學級一團となつて下敷になるではないか、そう考へると、もう訓導は一刻も躊躇しては居られなかつた。
「えい、進めといつたら進めッ!」
と、先頭の四五人を突つ放すやうに押し出す。
平生に似ぬあまりの先生の權幕に、おそれをなした殘りの子は、これを見て我も我もと西へ……と——二三歩歩いたその一組は、ビユーンと、まるで人形でも飛ばすやうに、北側の稻田の中へ吹き飛ばされてしまつた。
つゞく子も、つゞく子も、皆ビユーン〳〵と稻田の中へ……

叩きつけられた子たちは矢庭に起ち上る。起ち上ると又もビューンと吹き飛ばされる、

「稲の株をもつて頑張れッ！」

あらしの中に訓導の聲が——

が、生徒達は立てば吹き飛ばされ、飛ばされては倒れ乍ら、とう〳〵稲田を三四丁ほど北方寺田部落まで飛ばされていつた……

× × ×

この時、農業專科の淺川訓導は本館下の小使室近くに居て、凄い南中央校舍の倒壞を目擊した。

「これは大變だッ！」

と叫びざま、次は必らず來る本館校舍の運命を考へた。

訓導は本能的に素早く小使室の火を消すと、御眞影の奉安してある校長室へ飛びこんだ。

校長室の奉安庫には未だ鎖錠がかゝつてゐる——

「校長は未だ來てゐられるのだな？」

そう思つた訓導は、一刻も猶豫できぬこの危急時の非常手段——を考へた。

「では長くも自分が街眞影を……」訓導は、危急の中にも襟を正して奉安庫に近づき最敬禮する

と、思ひきつてその戸を開け、恭しく御眞影を奉持し、あらしの中をかねて定められた奉遷所へと向つた。

第一奉遷所は役場、第二奉遷所は垂水神社であつた。淺川訓導は、この暴風雨ではとても役場が危險なことを充分知つてゐた。

「第一奉遷所は駄目だ、では第二奉遷所は……？」

その垂水神社は、身體の吹きとばされさうな、この嵐の中を行くには、餘りに距離が遠すぎた。

「第二奉遷所も駄目……。」

そこで訓導は、此の非常時に相應しい臨時奉遷所として、信用組合を撰ぶ外ないと考へた。

信用組合は距離も近く、それに安全な金庫があつた。訓導は急いで信用組合へとかけつけていつた。

× × ×

こちらは山口訓導——

稲田の中を、風に吹き飛ばされ〳〵、寺田部落まで二三丁がほど胡蝶の樣に飛んでいつた教へ子について行き、すべてを安全に避難させると、泥まみれになつて、再び學校へ引かへして來た。その

時もう學校は空洞のやうに寂として聲がなかつた。

此の時風向は、南からやゝ南西に變つてゐた。

訓導は、何よりも氣になる中央倒壞校舍は？と、一氣に校庭の方へまはつたが誰の姿も見えぬ。何とも云へぬ空虛な心持になつた訓導は、

「オーイ、オーイ。」

と呼ばはつた、とその呼び聲に應じたかの樣に、倒壞校舍の下から、ぞろ〳〵と生徒たちが這ひ出して來るではないか。

「オ、、オ、、助かつたのか、よかつた〳〵。」

突嗟の感激に訓導はかう云つてハラ〳〵と涙をこぼした。

子供達は云ひ合した樣に皆無言で、そこにつゝ立つたまゝ空ろな表情で四邊を見まはしてゐる。

フト見ると、倒壞校舍の東の端の方に當つて、大きな手が出てゐる。

よく見ると、その手がしきりに動いてゐるではないか……

「オヤ……」

と訓導は、矢庭にそこへ飛んで行くと、

誰だ、誰だ、しつかりせ、しつかり……」

訓導は狂氣のやうに叫びつゞけた。

……」

が、應へはなかつた。

振る手をよく見ると、それは見覺えのある藤田訓導の服地ではないか。

「アッ！藤田君だ。藤田君しつかりせいッ！」

山口訓導は狂氣の樣になつて、そこいらの重壓物を取り拂ひだした。

「待つてゐてくれ、もうすぐだ、もう……」

而し、巨貫の材木が重なり合ひ、錯綜した倒壞校舍は、とても一人や二人の力では、どうする事も出來るものでなかつた。

藤田訓導は、しきりに手を振る。山口訓導は氣が氣でない。

そこへ長屋女訓導が來合はせた。

「オ、、長屋先生！これ藤田先生なんだ。可愛想に……アヽ、あなた一つ、警察へ知らせて呉れないか？」

「えゝ……でも藤田先生を――？」
「いや、それだから急ぐんです、とても一人や二人では助け出せないんだから……」
「アヽ、そうね、では妾行つて來ます。」
長屋女訓導は、尙もふきしきる風雨の中を、校下の派出所さして駈けてゆく……つゞひてそこへ駈けつけて來た田中給仕は、
垂水へ――
兒童乍ら高二といふ最上級生の責任感から、健氣にも逸早くこゝへ救援にかけつけた野口生外二名も、同樣に救援を求めに榎持部落へ――
そして、山口訓導自らも、一刻もそこにじつとして居られぬ焦心に、これ又黑戸方面へ――

× × ×

こちらは淺川訓導――
無事御眞影を奉遷すると、憩ふ間もなく學校へ引かへしてくると、まつ靑な顏して駈けてくる長屋女先生と出會つた。
「マア先生ですか。」

と長屋女先生は早や涙聲。
「どうしたんです、何か？」
「エー、とても――倒れた校舍が――それに藤田先生が――」
ミ杜切れ〳〵。
「何？藤田君が――？」
大体を聞いた淺川訓導は、大きくうなづくと、
「では、僕が行つてあげます。僕の方が早いや、あんたは早く學校へ歸つて子供達の世話をしてやつて下さい。」
といふが早いか、又しても一目散に警察へ――

三、奮鬪負傷の二訓導

三訓導はじめ、給仕、上級生の懸命の奔走で、學校の凶變は忽ち校下一圓に知れ渡つた。
急を聞いて馳せ集る村の人々早くも百人、二百人……
そして雨なほ止まぬ校庭に、一瞬を爭ふ救援作業は始められた。

眞先に、大きな合掌に腹部を挾まれて身動きの出來ぬ上、强か脊髓を打たれた一年男子組の藤田先生救がひ出された。訓導は、もう口も利く事の出來ぬ程の重傷であつた。が講堂へ運ばれ乍ら、尙しきりに手を動かし〳〵、苦しい息の中から、

「僕の生徒は……僕の組の……」

と、一途に敎へ子のことを案じる樣子は、悲壯そのものであつた。

つゞいて多くの生徒の慘死負傷者に交つて、三年イ組擔任の石橋先生が掘り出された。石橋訓導は、受持兒童を逸早く階下に降し、階下廊下を北本館へ移らうとする、中央廊下近くで受持兒童を庇ひつゝ遭難したのであつた。

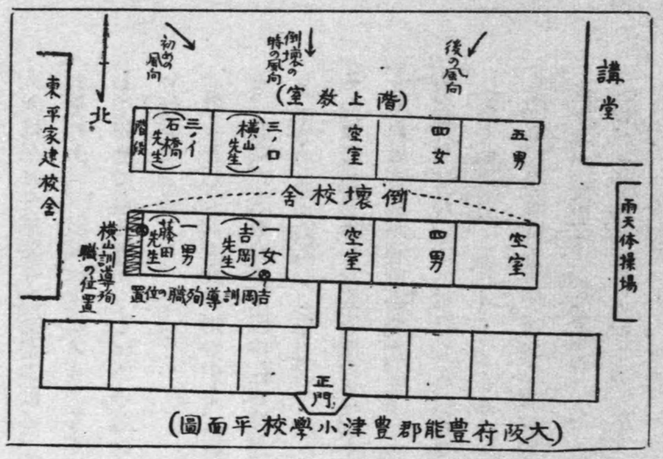
脊髓を折られた致命的の重傷に、總が〻りで講堂へ運ばれた訓導は、苦しい中を頻りに起き上らうとする。介抱の北訓導はこれを見て、

「オイ、石橋！駄目だ。そんなに無理をしちあ……寢てろ〳〵、寢ろッ！」

と怒鳴るやうに云ふ。

と、石橋訓導は、怨めしそうに北訓導を見上げて、

「何、寢てろつて……これが……こゝに、じつとして居られるかい。」



(大阪府豐能郡豐津小學校平面圖)

と云ひ〳〵、又も起き上らうとする。

「オイ、君は大事にせんといかんのだぞッ！な、な、靜まれ〳〵。」

そうやさしく云ふ北訓導に、すがりつくやうに訓導は、

「オイ、北君、うちの組の子は何人やられたんだ、何人？」

と一途に受持の兒童を案じとほすのだつた。そうする中にも刻々掘り出されゆく重輕傷の子供やむごたらしく打ち殺された慘死兒童が、續々と講堂へ運びこまれてくる……

その度に己の重傷も何も忘れたやうに、石橋訓導は、血の氣の失せた衰へた眼で、じつとそれを見つめては、

「若しや我が敎へ子では？」とハラ〳〵する。

四、六人の「命親」吉岡先生!!

この時、高槻の工兵隊から救援の一隊が駈けつけた。

人々は思はず感謝の歡聲をあげる。

それから、救援作業はメキ〳〵と捗つていつた。といつても何分上から順々に、心急ぐ中を「若しや生きてゐる者が……」との懸念から、まるで腫れものに觸るやうに取り除けて行く、まどろしい作業である。

默々として尙も降る雨の中を、涙と汗の勞作はつゞく……

と、在鄕軍人會の大河原中佐が突然叫んだ。

「オ、、先生が、ここに死……」

その聲にハツとした人々は、どつと中佐のところへ集つて來た。

それは吉岡訓導であつた。

吉岡訓導は俯つ伏しになつて、兩手を左右に翼の樣にひろげてて、ぐつたりとなつてゐる。

と——

この時、訓導は兩手を頻りに動かす樣に見えた。

「オ、、先生は生きてゐられる、生きて……」

「早く除けよ、早くッ！」

一同は急に勢を得て、壓しかゝつた木材をとり除けにかゝつた。

が、あゝ！

訓導は倒れ來つた巨木の一擊に、無慘！頭部を割られて鮮血に染つて死んでゐた。

と、すべてのものがとり除けられた時！訓導が翼のやうに擴げてゐた兩手の下から、身體の下から、微傷だにない一年の女子が——訓導の敎へ子が二人、三人、五人、六人まで——辻敏子、松本愛子女をまつさきに、丁度親どりに護られた雛が、その翼から——綿毛から——チョコ〳〵と顏をのぞかせる樣に出て來たではないか。

人々は奇蹟に直面したやうに、しばし茫然自失した。がやがての事、

「オ、六人とも無事に……」

「吉岡先生に護られて……」

「まあ!!先生が六人の子を……」

感極まつて、あやをなさぬちぎれ〳〵の言葉が四邊に起つたかと思ふと、誰かゞ狂氣の樣に、

「先生ッ！」

とばかり、雨に打たれる悼ましい訓導の死骸にとりつき、とりすがつて、「ワツ！」と泣きくづれ

てしまつた。

助けられた六人の生徒が泣く……並居るすべての人も泣く……その切々として腸をちぎられる哀音に暫し非情の風雨までも悲しむ樣―やがて吉岡訓導の尊き死體は、しづかに講堂へ運びゆかれた。

五、横山女訓導は三人の救ひ主

救ひ出されては收容されてゆく悼ましい慘死兒童や、重輕傷兒童に充たされた講堂内は、目もあてられぬ有樣であつた。

四十九名の死者、六十名に餘る重輕傷者！

うめき！

叫び!!

泣き聲!!!

それを取りまく、附添ひの人々の狂亂！

外は戰場のやうな混雜!!

なほも意地惡く吹きすさぶ風雨!!文字どほり豐津校は修羅の巷と化していつた。

この混亂の中に、中出淑さんは、自ら足に負傷したのも顧みず、自分の傍で木の下敷となつて苦しみつゞけてゐた友を救ひ出す爲に、甲斐々々しく立働き、江原三夫少年は、自分のシャツを脱いで眞つぱだかとなり、之を引き裂いて負傷した友を繃帶して介抱するなど、涙ぐましい數々の美事が演じ出されていつた。

と、又しても救援に懸命のすべての人々を、心から泣かせる悲痛な場面が展開された。

横山訓導の悲壯な殉職！がそれであつた。訓導は三年ロ組擔任として僅か二十日、村人にはまだ顏なじみ一人とて無い新任の身であつた。

最初藤田訓導が、救ひ出された箇所にほど近い、こな微塵になつた東階段の底から、若い横山訓導は、顏面をざくろの樣に割られた、見るもむごたらしい慘死體となつて發見されたのであつた。

そして、それが辛くも同動の訓導達によつて、横山訓導であることがわかり、涙と共にいざ講堂へ――と屍體を運びゆかうとした時、今までその愛の翼の下で、身動きもならず息をころして居た教へ子が、一人ならず三人まで、少しの傷も負はぬ安全さで救はれてゐたとは……

あゝ、一人ならず二人まで、か弱い女の身を以て死の眞際まで教へ子の安全を計り、身を犧牲にして之を助けた愛の訓導を出した豐津校！あゝ、教育は愛!!愛に極る。

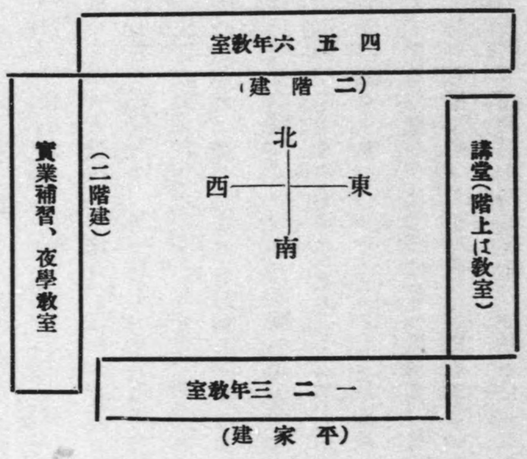
第八章　里見豐昌訓導の殉職

——大阪市姫島尋常高等小學校——

一、運動場を中に方形の校舍

大阪市西淀川區にある姫島小學校は、在籍兒童千八百人、職員三十四名、三十學級編成の大小學校であるが、尙も增加する兒童の爲に、最近校地東側に、堅牢と輪奐の美を誇る新校舍を建築した事によつて、運動場を中央に包む方形の校舍となつてしまつた。

この新校舍は、階下を講堂兼雨天體操場に、階上を普通教室として使用し、これに向つて西側にある建築年度のこれについで新しい二階建校舍を、實業補習並に夜學校用教室に、道路に沿ふた北側の二階建校舍を四、五、六年の教室並に校長室、職員室、使丁室に配當、南側の、建築年度最も古い、既に改築案成り次年度早々、改築に取りかゝる事にまでなつて居る腐朽甚だしい平家建校舍に、一、二、三年の生徒を收容してゐた。



今回の颱風の魔手は、この學校にものび、北側市道に沿ふた二階建校舍は一擧にして倒壞、爲に兒童中死亡者十一名、負傷者五十名を出し職員中にも五名の死傷者を出し、使丁の一人亦遭難するの悲慘事を招來したのである。

悼きしい犧牲者(廿四日現在)は、次の通である。

訓導　里見豐昌氏

兒童

尋四　谷川奈良一君　北村信一君
田太　稔君　北村爲之君
樋笠　治君
尋五　青野　馨君　漆原一夫君
尋六　町野卯三郎君　横田五郎君
松本　實君
道井　睦男君　使丁(幼)　秋田卯之助氏

二、災禍前後の狀況

この日、寸後にかゝる凶變の突發するとは、神ならぬ身の知る由もない職員兒童は、早朝から風雨を衝いて續々と登校して來た。

それと共に學校內は、刻一刻——元氣の滿ち溢れた可憐な學童によつてもたらされる特有の活氣が漂ひはじめた。

が——

それは何時もの樣に、いつまでも續かなかつた。

次第に募つてゆく雨風は、教室といふ教室の窓硝子を、打くだいてしまふ激しさで吹きつけて來る

「ゴーツ！」

と吹きすぎる惡魔のうなりの樣な一風毎に、教室は氣味惡くゆらぐ…

バラ〳〵ツと吹きつける砂礫、屋根瓦の落ちてくだける音！

もうすべてが歴然たる暴風雨の症狀と化してしまつた。

わけても南校舍—無邪氣な一、二、三年の幼年組教室は、平日でさへ一寸の事にその搖ぎを見せる程であつたので、その頃の動搖は非常なものであつた。

「風向は南だ、南校舍が危い！」

職員達は期せずして立つた。そして、もう風向に逆ふては歩けぬ程の烈風强雨の中を、どつとばかりに南校舍へ駈けつけた。

教室では、すさまじい狀景を呈してゐた。どの教室でも〳〵、受持訓導をとり卷きからみついた子供達が、怖れと驚に狂氣の樣に泣きわめいてゐるではないか、この有樣に救援の職員は、

「よい子だ、泣くんぢやない、サア避難だ〳〵。」「早へ逃げるんだ、先生たちと一緒に……」

とばかり、受持の女先生たちと力を合せて、オロ〳〵する生徒達を、東校舍の講堂へ大急ぎで連れだしてゆく……

が、その避難すら容易の事ではなかつた、廊下へ出ると、どつと吹きつける强風に、小さい生徒達は「アツ！」と云ふ間に吹き倒され、吹き飛ばされやうとする。

「手をつなげ、手を……」

「しつかと先生につかまつて居れ！」

と叫ぶ聲も、ゴー〳〵と吹く風雨の音に消され勝……

そうした中に、徐々と幼學年級の講堂避難は進んでいつた。—

× × ×

これと相前後して、北側の二階建校舍も大混雜を呈してゐた。低い南側平家建校舍屋根の上方、無障礙の中空を、眞南からすごいうなりを立てゝ吹く强風は、東西左右の二階建校舍に遮ぎられたふくみ風を誘ふて、どつと吹きつけ吹きまくる物凄さ!!

忽ち二三教室の硝子窓は吹き外される——それと同時に潮のやうに吹きこむ雨風!!

「怖いッ!」

「助けてーッ!!」

「先生ーッ!」

と泣き叫ぶ生徒の聲、つゞひて「ドドドッ!」と階上から階段さして逃げ下りる音、音、響、叫號

そこへ高等二年男子擔任の里見訓導が、血相かへて駈け上つて來た。

訓導は前後を失つて、階段をころぶやうにかけつけ下りる生徒達を、

「騷ぐなッ!」

と制止しつゝ、危く人雪崩にならうとする階段の混雜を整理すると、

「サア、怪我せぬ樣に、講堂へ行つた〳〵。」

と、次々に降りて來る生徒たちの手をとつては、安全の彼方〳〵と送つてゐた。

職員の多くが、南校舍へ!の救援に出拂つて人手少なになり、自分たち一人ではどうにもならない急激な混雜に陷つて、ハラ〳〵しながら懸命に學級の管理につとめてゐた尋四擔任の高原訓導や五年擔任の由上訓導は、本校體育主任里見訓導の救援に百萬の援軍を得た思で、同じく久本、林の二訓導と力を合せて、只管、生徒の講堂避難につとめつゞけてゆく……

かうして、校長來ぬ學校內不時の混雜と騷擾も、出勤教職員の自治的献身の活動によつて、大方の兒童が安全地帶たる講堂へ避難を終り、もう僅かで殘りのすべてが完了すると云ふ間一髪、天地もくづれよとばかり、一きはすごいうなりと共に吹きつけた魔風一陣!!

と、メリ〳〵〳〵〳〵と云ふ斷末魔の響!

「アレーッ、先生ッ!」

とすがりつく生徒達……

「おゝ、おゝ……」とぐつと三人の子供をだき抱へ、脫兎のやうに校庭へ飛び出さうとする里見

訓導その上へ、あゝ投げつけるやうに校舍は倒れ落ちたのであつた。

× × ×

里見訓導と共に、力の限り奮闘した高原女訓導は、同じ校舍の下敷となり人事不省に陷つてゐたが、辛ふじて助け出された。

由上女訓導は右上膊を巨木に挾まれて一手を失ひ、阪大病院へかつぎこまれる。

久木訓導は打撲傷を、林訓導も手足に裂傷を受け、辛ふじて死を免れた。

が——

姫島校訓育の中心として、德化校下にあまねく、校長初め同僚の信頼篤かつた里見訓導は、三兒の犧牲となつて永久に起たなかつたのである。

訓導名は豊昌、三十五歳、愛媛縣の產、夙に鄕里の師範を出で、後上阪、姫島校に勤めること六年の久しきに及ぶ。

平素身を持すること謹嚴剛正、邊幅を飾らず、寡默實行、一見古武士の風格があつた。

而も今や亡し矣、噫！ 悲しい哉。

第九章　仲埜テル訓導　平井ノブ訓導の殉職

——京都市向島尋常高等小學校——

一、病校長の悲壯な奮闘

こゝ伏見桃山に近く、漫々たる水を湛えてゆるやかに流れる宇治川がある。

その川べりに位置する向島尋常小學校は、高等科一ケ學級、尋常科八ケ學級といふに不相應なほどの宏大な校地校舍を擁して、十二名の敎職員が、十年勤續の竹內校長を中心に、家族的な靄々たる空氣の裡に、育英の道にいそしんでゐるのであつた。

九月二十一日—

して、職員生徒等は宇治川に架せられたあの長い觀月橋を渡り、互にいたはり、いたはられつゝ、ぞく〳〵と登校して來た。

尋常二年イ組擔任の平井先生は、いつもの樣に同じ二年ロ組に籍をおく愛娘の衣子さんの手を引

いて、いそ〳〵と出勤してくる。

この夏以來狹心症を患ひ、醫師から絕對の靜居を勸告され、ずつと缺勤してゐた竹內校長亦―缺勤屆の期間中ながら―病を押して出校、珍しく職員室にその溫顏を見せた。

校父を迎へた職員室は、土砂降りに强風さへ加つて來た外の惡天候に引かへて、一陽來福のなごやかな空氣が漂ふた。

が、それもほんの束の間、次第に吹きつのる烈風狂雨は、何となく校內全體を不安の空氣に包みゆき、いたいけな生徒達の心をかき亂しはじめた。

「これは大變だぞ」と職員室の訓導達は、始業前まだ二十分ほどもある七時四十分といふに、早くも、夫々今日の授業用具を携へて、職員室からほど遠い南べりの各敎室へ、風雨をさけて講堂から渡り廊下をめぐつて、出かけていつたのであつた。

風雨は時の經過と共に益々はげしくなつてゆく―思ひがけないこの暴風雨に、いたむ胸を押へながら、竹內校長はまだフラ〳〵と浮く危つかしい足どりで、これ亦雨天體操場をまはつて、南側の敎室巡視に出かけていつた……

午前正八時―

風雨もものかはと、始業合圖のサイレンが、外のあらしの音に交つて鳴りひゞいた―

各敎室では、それ〴〵受持が、騷ぐ子供達の心を、せめて敎授によつて鎭めんものと、かすかに聞えた始業の合圖のしをに、

「サアお勉强だ。」

と時間割通り第一時の敎授にとりかゝつた――

けれど、それは無効であつた。

ガタ〳〵と、引きりなしに地震の樣に搖られて、無氣味な響をたてる硝子窓！

わづかの隙間から、さつと吹きこむ風しぶき!!

ザザザザツ！橫降りに浴せかけるやうな雨、雨!!

その間を惡魔のつく息の樣なゴーツ！とうなる風の音!!その度每に校舍は底氣味惡くゆらぐ……

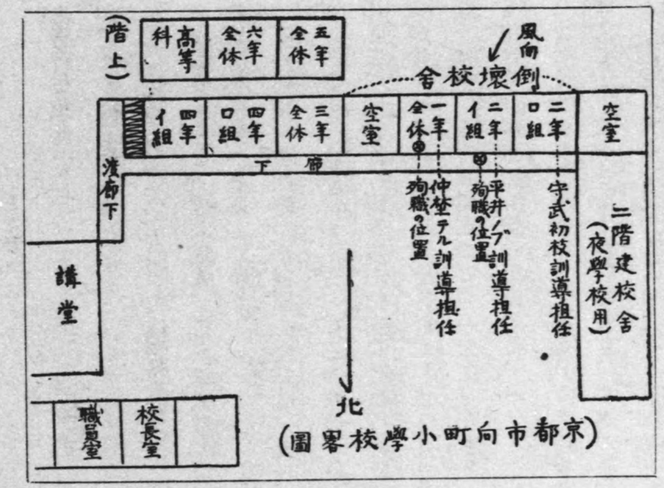
「……」

恐怖と不安が嵩じた極み、どの敎室でも恐ろしい沈默にかへつてしまつた中を、四十、五十のおびえきつた眼が……

と―

この時廊下で、
「皆、避難せッ！雨天體操場へーッ」
「早く講堂へ逃げよッ！」
と息せききつて駈けゆく聲。
「それ避難だッ！」
と二階建校舍階上からは五六年と高等科が、階下からは三四年がどつとばかりに飛び出してきた、
そして、雨天體操場への渡り廊下をまつしぐらにかけ出して行つたが、行く者も行く者も、横ぶきに吹きつける暴風雨を横に受けて、
ビューン〳〵と吹き飛ばされてゆく……
「あッ！危い〳〵。一人でゆくなッ!!」
それは竹内校長の聲、見るとその渡り廊下の口に、病んだ身をしかと柱につかまつた校長が、立つてゐる—
そこへ受持の訓導達が、
「早く早くッ！」

と駈けて來た。
が、この樣子を見ると
「ヨーシ、ちや二三人づゝ、連れて行つてやらう……」
と、息せく中を、二人三人、二人三人づゝ、手とり足とり、ともすれば四人一緒に吹き倒されそうな廊下を講堂へと運んでゆく……
この時南校舍西側の平家建校舍では、火のついた樣に泣き叫ぶ幼學年組の生徒を中に、守武、平井、仲埜の三女訓導が、今しはじめたばかりの讀方と算術の敎案をテーブルの上に投げすてるやうにして、同じく一瞬を爭ふ兒童の避難行動に移つて居た。
が廊下を出れば吹き飛ばされてしまひさうな激しい雨風、中はガタ〳〵と今にも倒れさうに搖り動く敎室、その間に立つて、「先生、先生ッ！」とからみつき、しがみつく子達を擁して、泣くにも泣けず、叫ぶにも聲の出ぬ思に、ハラ〳〵とする許り……
かうした中に平井訓導は、姙娠八ケ月の身重の身體であることも、壁一重隣りの守武學級に、我が愛し子—衣子さん—が居る事も、すべてを打ち忘れたかの樣に、一途に受持四十名の子の安全を
と、避難に懸命になつて居た。その隣りの一年組では、平生から男まさりの女丈夫型の仲埜訓導が



(京都市向町小學校署圖)

これは又、二人づゝを抱きかゝへては吹き飛ばされそうな廊下を講堂の方へ——又引かへしては次の二人を……

と男も及ばぬ勞作をくりかへしてゐた。

かうして講堂に近い三年以上の生徒が、辛くも避難を終へ、一、二年の一部が—不運にも避難場所たる講堂に遠い教室に置かれて居た爲め—か弱い女手で、運ぶやうに廊下を講堂へ〳〵と避難されつゝあつた八時十分ごろ、一きは激しい勢で吹きつけたあの魔の突風が、叩きつける樣にこの平家校舎を吹き倒したのであつた。

二、悲壯な守武訓導

避難の子供で一ぱいになつた講堂兼雨天體操場内

は、この時收拾すべからざる程の混亂に陷つてゐた。

魔風の一息毎にユラツ！と搖ぐ無支柱の大天井…それを見て狂ほしく喚き叫ぶ生徒！泣く子供!!

それを聲からして鎭撫につとめる竹内校長……

そこへ磯田使丁が顏色かへて、つぶての樣に飛びこんで來ると、

「校長先生ッ！大、大變です。學校が—南の—二年の教室が、た、倒れましたッ！」

と息も切れ〳〵の報告、

「エッ？倒れたッ!!」

と鸚鵡がへしにかう云つた校長の顏は、瞬間土の樣にまつ青に變つたかと思ふと、持病の狹心症發作で

「ウーン！」

とそこへ倒れてしまつた。

この引つゞく二凶變に、講堂内はもう鼎のわくやうな混亂に陷つてしまつた。

「先生ーッ、家へ歸らせてよーッ！」

「先生、講堂も倒れるよーッ」

「先生!!」
「先生ッ」
そうかうしてゐる裡にも、早や倒壊校舍の方からは、負傷した子供を抱いた訓導達が、ビショ濡になつてかけこんでくる……
子供達はもう狂氣の樣に立ち騒ぎ出した。さつきの發作で虫の息のやうになつた竹内校長は、餘りの事に度を失つてオロ〳〵と介抱してゐてくれる磯田使丁に云つた。
「オイ、磯田、お前ほんとに—ほんとにすまぬがの— 一つ死んだ氣に—氣になつて、川を越して行つて呉れんか…川を…そして、早く子供達を—生徒を救ひに來てくれる樣—賴ん—賴んで來て呉れ—の—橋はこの調子ぢや—とても通れまいとは—渡れんとは思ふが…」
苦しい息の中から、かう云はれた磯田使丁は、
「よろしい、大丈夫です。磯田參りませう、御安心なさい校長樣……」
と、矢庭に講堂を飛び出すと、危險の堤防を這ひながら、觀月橋の方へ—

× × ×

しばらくして、二年ロ組擔任の守武女訓導が、顏から胸にかけ眞赤に血に染まり、物凄い形相して、これも血みどろの受持兒童鄭一勉を抱きかゝへて、あらしの中を講堂へかけこんで來た——
この恐ろしい樣子に、生徒たちは
「キャッ!」と悲鳴をあげて泣き騒ぐ。
やつとの事立ち上つた校長は、これを見て、
「オ、守武さん!!やられたの—」
ともう身も世もない思に、聲が曇る。
「いゝえ、妾どうもありませんの、アッと云ふ間に下敷になり……暫くは何もわかりませんでしたが—フト氣がつくと——可愛想に、あちらでも、こちらでも泣く子、うめく子…それは〳〵…これは愚圖々々して居られぬと、木に挾まれた足を力まかせに拔き、無我夢中で屋根板みたいなものをつき破つて出て來たんですけれど……ア、それよりこの鄭を、何とかしてやらぬと……」
氣丈の守武訓導はかう云ふと、早や敎へ子の看護にとりかゝらうとする……
「おゝ、おゝ」
この健氣な女訓導の話をきいて、感動にうちふるえながら、校長はもう自分もじつとして居られぬ思に、つか〳〵と北側の壁際へ行き、そこにかゝつて居た幕をビリリと引き裂くと、それで鄭の傷

口をぐる〳〵と繃帶してやつた。

「まだ澤山あとに…」

と守武訓導は、顏面の血しぶきを拭ひもやらず、又も雨中の運動場を倒壞教室へ…

三、悼ましい訓導母娘

あらしの中を命がけの傳令—磯田使丁の知らせによつて、凶報は川向ふの街々へ傳へられた。

「學校倒壞!」

この思ひもよらぬ凶變に、子を持つ親たちは愕然として色を失つた。

忽ち學校に向つて人々は殺到した。子を思ふ親心には、其時もうあらしも觀月橋の危險も何もなかつたのである—

つゞいて急を傳え聞いた工兵隊が隊伍堂々と救援に駈けつけた。この時、講堂内にあつた生徒は勇ましくも雄々しくかけつけた工兵隊を見て、こみあげてくるうれしさと心强さに、思はずどつと萬歲を叫んだ。

かくて、工兵隊を中心に、父兄有志、消防隊、在鄕軍人會等協同の、救援掘り出し作業がはじめ

られた。

作業のすゝむにつれて、救ひ出されてくる子供達—多くは寸前の無邪氣な姿に變る半死半生のいた〳〵しい負傷の姿!死の姿!それをとり卷いて狂氣のやうに泣き叫ぶ父兄達!!

それらを雨中に講堂へ運び入れる混雜…そうした中を無情にも吹きまくる風と雨……

こゝ向島小學校は暫く文字通り修羅の巷と化してしまつた。

その中に、一年擔任のあの女丈夫で通つた仲埜訓導が、受持教室の入口と覺しい箇所で、太い柱樣の材木に身體を貫かれ、内臟を露出した見るも無慚な慘死體となつて掘り出されて來る—

その隣りの二年イ組教室の廊下からは、さつき方母娘二人でむつまじく手を執つて登校した平井訓導が、頭部を粉粹され悼ましい壓死を遂げてゐるのが發見される—

救援の人々は、何れもこの變りはてた、まともに面を向けることの出來ぬいぢらしい二人の女訓導の死に面と向つて、一種嚴肅な沈痛な感慨に、暫くは言葉もなかつた。

その時、その隣りの守武學級では、おゝ、平井衣子さんが、いぢらしくもお母さんと同じ運命の魔手に斃れてゐたとは…

涙と共に運ばれた二つの死體にとりすがり、只一人此世にとり殘された三年生の平井一郎君が、

身も世もあらず泣きくづれてゐるのを見ては、並居るもの皆、餘りの悼ましさ、はかなさ悲しさに思はずヨ、と泣きくづれた……

あゝ!!一擧に三つの生命を奪はれ去つた平井家の悲愁!!

思へば悲痛の極みでないか

× × ×

救援作業の終るまで—不慮の犠牲者職員二名兒童十三名—重輕傷者六十餘名に上る救出に—張りつめた心に、久しきに亘る自分の重症も何も打ち忘れたかの樣に、何くれとなく奔走した竹内校長は、作業が一段落つくのをしをの樣に、ぐつたりと倒れると、それからまる一日といふもの混沌たる不覺の境をさまよつてゐた—。

第十章　芦田政次訓導の殉職

——大阪市鯰江第二小學校——

一、南北の校舍相ついで倒る

午前七時半ごろ。

もう學校では、窪首席以下大部の職員が出揃ふて、はげしい雨風に困りぬいた出勤のことなど語り合ひつゝ、夫々教授準備にとりかゝつて居た。

生徒達も元氣にぞろ〳〵と登校して來る。—

が、時間と共に吹きつのつてゆく强風は、次第に子供の登校を妨げだした。

思ひもよらぬ方から、不意に吹きつける强雨に、アッと云ふ間に傘を奪られ、洋傘を折られてぬれ鼠になる子供!

かと思ふと、吹きつける風にしつかと傘を護る拍子に、抱えた本包みを泥の中へ取り落す女生徒…

さなきだに、横なぐりに吹きつける雨風に、腰から下をぐつしよりと濡らしてしまひ、困りぬいた

子達が、此狂人ぢみたいたづら風に、泣くに泣かれぬ思ひで、それでも辛ふじて校門まで——そしてホッと一息ついた頃は、いよ〳〵募りゆく强風に、教室の硝子戸がガタ〳〵〳〵と、地震にでも見舞はれた時の樣に無氣味にゆり動き、時折はバラバラッ！と二階屋根の瓦さへ落ちて來だした。

「無茶な風だなア」

「まるで暴風雨ぢやないか」

など語り合ふてゐる職員室へ、慌しく週番上級生の一人が駈けこんできた。

「先生ッ！南校舍教室の硝子戸が、風に吹き外されて大變です…早く來て下さい。」

「そうか、よーし！すぐ行く。」

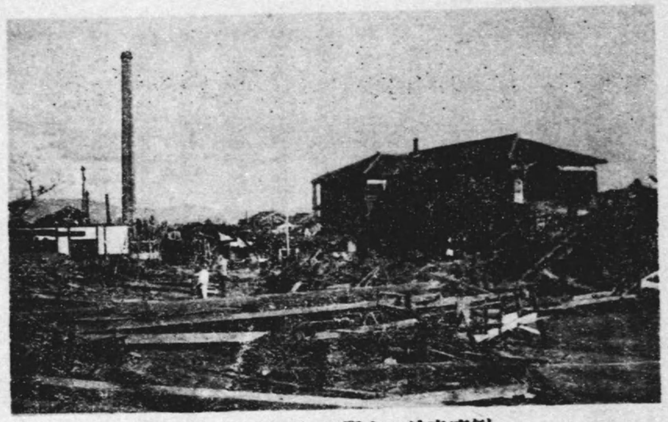
週番生徒は一禮して、急ぎ足に出ていつた。

職員達は一齊に立ち上つた。

そして一種緊張した氣分でそれ〴〵受持の教室へ出てゆかうとした。

と、窪首席は立つて靜に言つた。

「まだ校長が見えぬので、私から一寸申上げて置きます—大分風がひどくなつた樣ですから、若しも、萬々一ですネ、教室が危險—？とでも感ぜられる場合には、南新校舍へ子供を避難させて下さる樣に……」



倒壞直後の大阪市鯰江第二小學校

職員達は、夫々うなづき合つて、急ぎ足に教室へ出ていつた。

七時四十五分！

その頃はもうすべての狀況が、純然たる暴風雨と化してしまつてゐた。

各教室では、受持訓導が最前職員室で、窪首席から聞かされた非常の場合としての、南新校舍避難のことを思ひ浮べ乍ら、烈風の一息毎に目に見えて動搖する子供と共に、流石不安に面を曇らせてゐた。

とどつかの組が、

「避難だ〳〵。」

と口々に叫び乍ら、慌しく廊下を駈けだした。それを機會（しほ）の樣に、南の二階建校舍の上級生組は、

「ソレッ！」

とばかり教室を飛び出すと、階段をころぶ様にかけ下り、廊下を南新校舎へ一散にかけてゆく……

幼學年兒童の北校舎では、かうした時の混亂が一層甚しかつた。

只もう譯もなく、不安と怖れになき叫ぶ子供達……

それをどう處置すればよいのか——小石がつぶての様に飛び來り、屋根瓦がバラバラッとふき落される運動場へは勿論出られない……といつて廊下は、ユラ〳〵とまるで小舟にでも乘つて搖さぶられる様で危險此上もない……

風は得たりと、ゴーゴーと吹きつけて來る…寸時も愚圖〳〵しては居られない。

「そうだ。危險でも、外へ出すより外にてだてが無い—そして新校舎へ伴れてゆくのだ。」

即座にそう決心した訓導達は、

「サア皆出るんだ出るんだ。教室内に居ると 危いから……早く、早く……こんな時に愚圖々々する人は駄目だよッ！」

とすかしつおどしつ、引つぱるやうに階上は廊下から階段へ、下は北廊下から渡り廊下へ……と避難させてゆく……

この時、北校舎の階下——東端の「たまり」につゞく一年組の教室では、受持の中村訓導が、この凄い有様におびえ恐れて手足も出ぬほどいぢけきつた子供達を、一人一人だきかゝえては瓦礫の飛び散る校庭を新校舎へ、往つては引返し、歸つては又行く必死の避難に、もう夢中となつてゐた。

一方同じく階下西側の方では、二年女子組擔任の芦田訓導が、これ又受持兒を五人づゝ一組として、中村訓導同様、渡り廊下を通つて南新校舎へ……の避難操作に大童のまつ最中……

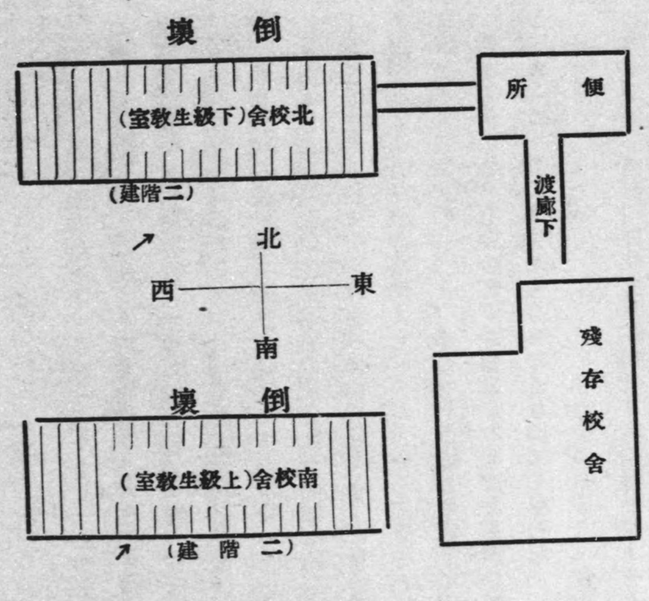
かうして北校舎の階上の生徒の大部階下の幼年組兒童の過半が、擔任訓導の愛の手によつてあらしの中を避難し終り、今はもう僅かの殘り……となつた時、—それは一年の中村訓導が階下東端のたまりに集めた子供のすべてを、やつと今し避難させ終つた時、二年女子組では芦田訓導がもう僅かになつた五人組の一つを、抱へるやうにして廊下に出やうとした一刹那！

吹きしきるあらしの中に、遠雷の轟のやうな音がしたかと思ふと、バツとあがつた砂塵に、そこいら一切が、物のあやめも分らなくなつてしまつた。

と——

これもかすかに—而し一種悲痛な—人の魂を刺すやうな

「學校が倒れた—ッ!!」



「學校がこわれたよーッ!!」

といふ叫び聲が、地の底からでも叫ぶ樣に聞えてきた。

この聲に、この叫びに、北校舍階上につて居た僅かの生徒たちは、餘りの驚きともうちつとして居られぬ焦心に、氣も顚倒したか、二階から西側の砂場目がけて飛び下りる者、そうかと思ふと、おのが傘を當座の落下傘として、東二階の窓から傘をひろげフハリと飛び下りるなど、命がけの避難がぞく〳〵はじめられた。

と、この時、一きは激しい突風が——今はもう南側に障礙物ない校庭を、南西からビューッと力の限り吹きつけたかと思ふと

「メリ〳〵〳〵ッ!」

と云ふはげしい響と共に、北校舍亦一たまりもなく地ひゞき打つて倒壊してしまつた。

と、どつとあがる濛々たる砂塵に、又もしばらくは咫尺も辨じ得ず、風雨徒に地上に叩きつけられた二校舍の殘骸を打つのみであつた。

二、一死以て三名を救ふ!

狂ほしく泣き叫び乍ら、風雨の中を「學校が倒れたーッ」「學校が潰れたッ!」と告げ歸つた生徒達によつて、學校の災禍は、忽ち校下へパッと傳はつた。

「ソレッ!救援だッ」

「うちの子の安否は…?」

と取るものも取り敢えず、どつと集つて來る人々。消防隊が來る、鯰江青年團が駈けつける…

忽ち、倒壊した二校舍で一ぱいになつた校庭は、それらの人々で充滿した。

そしてはげしい雨中を、寸秒を爭ふ救出作業がはじまつたのであつた。

校舍倒壞のその刹那まで、身の危險をうち忘れて、受持の一年生を一人一人南校舍へ抱き運んでゐた中村訓導は、あはれ兩足を梁の下に挾まれて、身動きもならぬ重傷を負ひ、近づく死の運命を待つて居たが、やつとの事で救ひ出された。

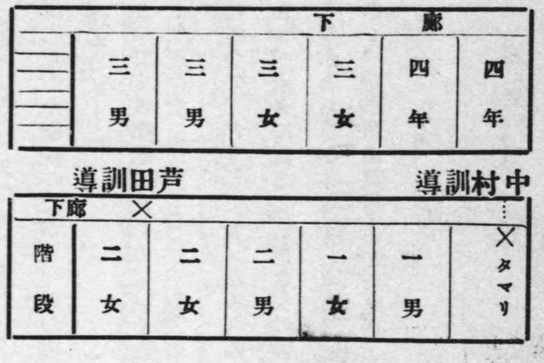
訓導のこの献身的奮闘によつて、慘害の最も甚しかつた北校舍から、その受持の一年生が、ほとんど皆無事に避難する事が出來た悲壯な美談は、今に校下父兄の感謝の的になつてゐる。

中村訓導遭難の場所からやゝ西寄りの廊下、受持學級教室の出入口と覺しい所からは、芦田訓導が悼ましい死體となつて發見された。

五人づゝ五人づゝ、已が擔任の子供をだき抱へる樣にしては、渡り廊下を通り南新校舍へ避難させてゐた訓導は、大部を安全の場合に移し、最後の五名を抱きかゝえる樣にして廊下へ出た刹那、倒壞した校舍の下敷になつたもので、うつ腑しになり頭部顏面を打たれ兩手をひろげた訓導の腕には、二年の女子が二人同じ運命に斃れてゐたが、あゝ殘りの三名は、訓導の生死を超越した愛護の肉壁によつて微傷だに負はず、救援の人々の手によつて救ひ出されてきた。

この崇高な犧牲愛の場面に直面して、人々は今更の樣に師の恩を思ひ、教育の尊嚴を考へさせら

北校舍教室配置圖



れたことであつた。

おゝ、崇高なる愛の肉壁！

三、お父ちやんは學校よ

かくて一朝の颶風、一校二十二名の兒童の生命を奪ひ、四十名に餘る重輕傷者を出し、校舍の大半を壞滅し終る。誠に悲慘の極であつた。

芦田訓導の遺骸が、朝がたのあの凛々しい登校姿とは比べもつかぬ變り果てた姿で涙と共に家へ運ばれた時、今年四才になる訓導の長男の政夫君は、顏面を眞白に卷いて碎かれた箇所を掩ふた悼ましい姿を

「坊やのお父さんよ」

と涙の中から母なる人に教へられても、いつかな聞かず

「いや、違ふ、あたいのお父ちやんこんなでない、お父ちやんは學校よ、——學校の先生よ。」
と信じきつた學校の父が、今朝の姿のまゝで、いつもの樣にニコ〳〵と、
「坊や只今！」
とつてくる夢を抱きしめ、いくら敎へても諭しても、
「違ふ〳〵。」
と頑張つて、どうしても父なる人の亡骸に合掌禮拜しなかつたとは……
あゝ、永久に歸ること無き父の歸りを信じて、一途にそれを待ちわびる小さき可憐の魂に、涙せぬものがあらうか！
あゝ、殉職芦田訓導！

第十一章　飯野重義訓導　村上ノブヱ訓導の殉職

——大阪府三島郡如是小學校——

一、三島野に孤立する校舍

大阪府高槻町近くにある如是尋常高等小學校は、ぐるりに一軒の人家とてない三島野に、ポツリンと建てられてゐた。
その校舍は、先年、さる古い學校を移轉再建したものと聞かされるまでは、誰でもそれが新築と信じきる位の立派さと頑丈さに見えた。
九月二十一日の朝、
次第にはげしくなりゆく暴風雨は、何の障害物も被覆物もない高みの校舍へ、眞向からビユウ〳〵と吹きつけた。登校の生徒たちは、そのもの凄い勢に恐れをなして、烈風毎に氣味惡く搖れる敎室

の机にしがみついて、まつ青な顔してガタ〳〵うち震える有様――

職員室の訓導たちも、受持の事が氣になるまゝに、一人出てゆき二人出てゆき……いつの間にか皆教室へ出拂つてしまつた。

暴風雨は、刻一刻猛烈になつてゆく……

「これはいけないぞッ早く生徒を避難させなくては……」

一きは風當りの激しい階上教室の飯野訓導は、一瞬を爭ふ危急の場合の臨機の處置として、即座に受持生徒に命令した。

「サア、皆下へ避難だッ、階段に氣をつけて―早くッ!!」

聲の下に、生徒達は忽ち教室を飛び出した、そしてドドドドドッと、えらい勢で階段をかけ下りてゆく……訓導は、すぐ隣の教室の村上女訓導を、廊下から大聲で呼んだ。

「先生ッ!早く子供を下へッ」

と、村上學級の生徒たちも、顏色かへてどつと廊下へ飛び出して來た……

飯塚訓導の機宣を得た處置で、生徒たちは、敏速に階下へ―そして安全地帶へ―

この時、ホッと息をついた訓導の頭をチラとかすめたものがあつた。

「ヒョッとするとまだ、あとに殘つてゐる生徒が―?」

そう思ふと訓導は、もうちつとも、ぢつとしては居られなかつた。

「ヨーシ―見て來よう!」

かう獨り言の樣に云つて、訓導は危險が一秒毎に加はつてゆく階上教室さして、飛鳥のやうにかけていつた。

この時、村上女訓導が受持兒童の殿りになり、子供を助けつゝ階段を半邊まで降りて來てゐた。

「階上に未だ生徒が殘つて居ませんかッ?」

すれ違ひざま村上訓導に聞くやうな、又獨り言のやうに早口にかう云ひ云ひ、飯野訓導はカッ〳〵〳〵と階段をかけ上つていつた。

此の刹那、すさまじい勢でどつと吹きつけた魔の突風は、アッと云ふ間に二階建校舍を横薙に壓しつぶす樣に吹き倒してしまつたのであつた。

二、承け繼ぐ教育者の血

村上女訓導は、いたはり助けつゝ避難してゐた教へ子と共に無殘な即死をとげた。

四邊に人家とてない野中のひとり立ち校舍の事とて、倒壞校舍の下敷となつた職員生徒の救ひ出し作業は、仲々捗らなかつた。

やつとの事で、大きな材木の下敷となり瀕死の重傷を負ふた飯野訓導が救ひ出された。

訓導は、虫の息の中から、

「すみません、それより生徒たちを……生徒を……」

と囈言のやうに、くりかへし〳〵云ひながら、三島病院へ收容された。

病院で應急手當を受け絶對安靜を命ぜられてからも尙、生徒のことを案じては、

「生徒たちはどうなつた?——死んだ者は少しですんだ?」

と氣ちがひのやうに口走つてゐたが、訓導亦その夜、遭難兒童の跡を追ふたのであつた。

死の瞬間まで敎へ子の名をよび、敎へ子の上を思ひ煩ふた飯野訓導は、年二十三、天王寺師範の專攻科を出て、一昨年赴任した新進氣鋭の敎育者、現に高津中學校につとめつゝある父の血を承け、敎育愛の結晶とも云ふべき靑年敎師であつた。

僅か十名の職員の中より、一朝にして二人の優良敎師を、校舍と共に奪はれた如是校よあゝ!

第十二章　高塚武訓導の殉職

——堺市錦尋常小學校——

一、硝子窓を吹き飛ばす烈風

九月二十一日午前七時二十分ごろ——

堺市錦小學校では、もう三百名近い生徒が登校してゐた。

時と共につのりゆく暴風雨は、東方から二階建南校舍を横拂ひに、ビュー〳〵とすさまじい勢で吹きつけてくる、その度にガタ〳〵と破れるやうになる硝子窓!!

「えらい暴風雨になつたぞッ」

と登校の訓導達は、ぬれたレンコートを脫ぐと、憩ふ間もなく大急ぎで受持の敎室へ、氣せはしげに看護に出かけてゆく——

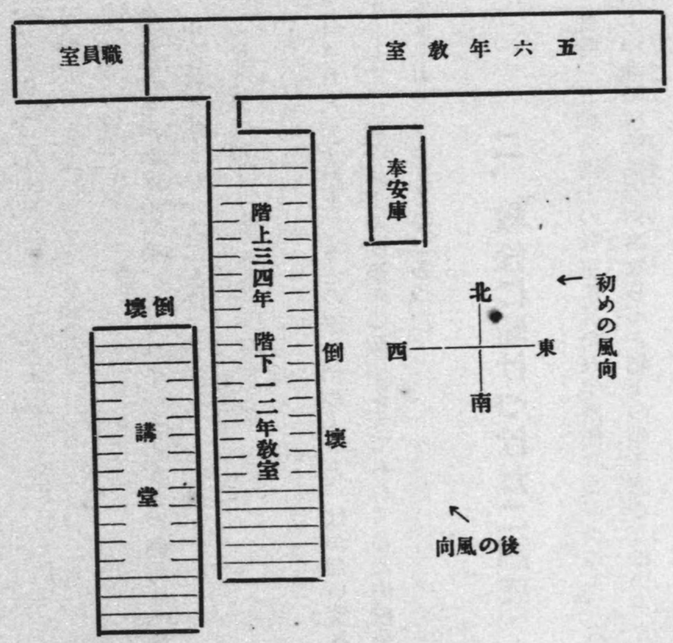
敎室内はどことも、大騷ぎであつた。

「靜まれ、靜まれッ！」
受持は頻りに制止する――がつのりくる恐怖と不安に、生徒たちはいつかな先生の聲を聞かばこそ
と、又してもビューッ！ザザ――ザツと激しい雨風!!
「ウワーッ！」
とあがる叫聲。
もう手がつけられなかつた。
その中にも、風速は益々上つてゆき、
「ゴーッ、ゴーッ！」
とつく惡魔の息はいよ〳〵しげくなつてゆくばかり……
此時、一際ひどく吹き來つた烈風は、
「アッ！」
と云ふ間に南側の硝子戸を、一撫に吹き外してしまつた。
「ザザザザ――ッ！」
とうつすやうに、吹きこむ雨風!!

「キャッ！」
「ウワーッ!!」
と子供たちがあげる叫喚、つゞひてバタ〳〵と西側廊下へ逃げ出す生徒!!
中に氣丈な子の一人二人は、
「早く來て頂――」
「早く〳〵ッ！」
と外された硝子戸を、もとの窓へ納めようと、はかない望みに救ひをよびつゝ金切聲をはり上げるかうして、四年以下の幼學年の教室に充てられてゐた南校舍十二教室は、あはれ狂風激雨の蹂躙に委せられやうとするのであつた。

二、救援に駈けつけた二訓導

此時、北校舍階上の教室に居た五年擔任の高塚訓導と、六年擔任の山添訓導は、啻ならぬ南校舍からの悲鳴叫喚に、何事ならんと廊下の硝子窓ごしにのぞき見ると、どの教室も硝子窓と云ふ窓は



ほとんど皆吹き外されて、しまつてゐるではないか、

「これは大變だッ!!」

と、とるものもとり敢えず、廊下を南校舍へ一散走りにかけつけた。

と、六年男子の週番生橋本利一郎少年もあとにつゞいて同じく南校舍へ…息せきゝつて來て見ると、見た以上のひどい有樣に、二訓導は口々に、

「危い〳〵ッ！ 早く北校舍へ、逃げよ〳〵ッ!!」

と叫び乍ら、南のはしの教室まで飛ぶやうにかけていつた。

三年擔任の小谷女訓導と四年擔任の

南川訓導は、思ひがけないこの二訓導の應援に力を得て、

「サア早く早くッ！」

と、せき立て〳〵生徒を北側の階段の方へつれてゆく……

階下の一二年教室では、此の時同じやうに一年受持の吉田、桑原の二訓導と、二年受持の森上訓導が、ハラ〳〵する愚ひで、小さい生徒たちを北校舍の方へ避難させてゐた。

そうするうちにも、いよ〳〵募り來つた風の足なみ！それは實に敎へ子を安全地帶へ！と一途になつてゐる訓導たちにとつては、限りない焦心の刻々であり、運命の一瞬であつた。

三、奉安庫に向つて萬歲をッ！

午前七時三十分！

それは南校舍階上で、高塚訓導がそばに影の形に添ふやうに、まめ〳〵しく助手をしつゞけてゐる六年生の週番生橋本少年と、後番になつた三四年生の避難を助けながら、大方北階段近くの教室まで來てゐた時、階段下の渡り廊下では、山添訓導が上から落ちくる瓦石の危險を防ぎ、生徒を安全

に北校舍へ移さうとの心遣ひから、小黑板を兩手に捧げて、
「早くせよ〳〵。」
と、連呼してゐた時であつた。
「ゴーッ！」
といふ惡魔の吐息のやうな物凄いうなりと共に、吹きつけた突風は、
アッと云ふ間に、小黑板を持つて立つてゐた渡り廊下の山添訓導をブーンと七八間西、通用門傍の山口商店まで吹き飛ばしたかと思ふと、長い〳〵二階建南校舍は、その西に建つた講堂もろ共、
「ガラ〳〵〳〵ッ！」
と大音響と共に倒壞してしまつた。
「パーッ！」
と立つ土けむり、つゞひて
「キャーッ！」
「助けてーッ！」
「先生—ッお父さーん」

と叫び呼ぶ悲痛な聲…北校舍の硝子窓からは、餘りの事にまつ青に土色になつた、幾つもの顏が、目ばかりギラ〳〵光らせて、この凄い校舍の倒壞を、生つばきをのみ〳〵手に冷汗を握つて眺めてゐた——
此の時「アッ」と叫んで、側の生徒の四五人をかばひ、そこの机の下へかくさうとした高塚訓導は、どつと落ち來る梁と机の間に挾まれてしまつた。
そのすぐ側には、橋本少年が、さつき訓導が机の下へ入れて、助けやうとした四五人の生徒と共に、不思議に出來た空隙にヒタと身を縮めて微傷だに負はず、ブル〳〵とふるえてゐる——
あちらからもこちらからも、下敷となつた生徒たちが、斷末魔の苦しみに、
「ウーム〳〵。」
「助けてー。」
「痛い、痛——」
と、云ひやうの無い悲痛な聲をあげる。
それが聞えたか、高塚訓導は、もうはつきりと見えぬ眼を大きく見開いて、
「オーイ、皆、大丈夫だぞ——ッ、しつかりせ——すぐ助けて貰へるぞ——ッ!!」

ときれ〳〵に呼び、激勵する。これを見て、橋本少年が、
「先生ッ！しつかりして下さい。しつかり……」
と這ひ乍ら、訓導の側へよつてゆくと、
「オ、、橋—橋本君か——、お前、早—早くこゝを出て—助かつた子をつれて出て—やれ……早くッ！」
と、今にも死が迫つてくるのも忘れたやうに、敎へ子を救ひ出すことを橋本少年に命じた。
「ハイ。」
と答へた橋本少年は、危險の中を、そばでブル〳〵うち震へてゐる小さい生徒の手を引いて、倒れた校舍のすき間〳〵を求め〳〵て、外へはひ出して來ると、
「早く逃げるんだッ！」
と、その子供たちに云つて、再び中へ……
その時、高塚訓導はもうぐつたり弱つてゐた、あたりから聞える生徒達の叫びも、きれ〳〵にそして細くなつてゐた。
「先生しつかりッ！」

と橋本少年が云つたのも、もうわからぬか、訓導は何とも云はなかつたが、やがての事、急に元氣な樣な聲で、
「オイ、皆—もうおしまひだア—さ—さア、先—生と—一—一緒に—奉安—奉安庫の—方へむ—向つて—バ—バン—萬歲—イ、と——云へ—ッ！」
と、いつたかと思ふと、忽ちぐつたりとなつてしまつた。
りの悲しさ、怖ろしさに、橋本少年は、泣き出すそばの子供をつれて再び外へ……
此時、もう外では、暴風雨の中を多くの人々が、狂氣のやうになつて、下敷となつた者の救援掘出しにかゝつてゐた——

四、重傷にうめく五訓導

錦校はかうして、一朝にして一訓導と三十九名の兒童を喪うた。
その外に傷いた生徒七十餘名。
そして傷者の中には、高塚殉職訓導と同じ樣に、最後まで敎へ子の爲に奮鬪した、一年二組の桑原訓導、二年三組の森上訓導、三年三組の小谷訓導、四年一組の吉川訓導、四年三組の南川訓導の

五人が、加はることを記憶せねばならぬ。

× × ×

同じく最後まで奮闘して校舎の下敷となり乍ら、奇蹟的に助かり、倒壊校舎の中から七八人の教へ子を救ひ出した一年一組の吉田訓導と、小黒板と共に突風に七八間も吹き飛ばされ、つぶての様に商店の硝子戸にぶちつけられ、剰へ傍の溝の中へ投げこまれ乍ら、輕傷で助かつた六年一組擔任の、山添訓導の二人は、眞に天祐であつたのである。

あゝ！、六訓導の血汐と愛の肉壁に護られた堺市錦校……

第十三章　新葉庄司訓導の殉職

——大阪市鶴橋第二尋常小學校——

一、任務は重し宿直勤務

九月二十日夜の宿直勤務は、新葉庄司訓導であつた。

晩方から陰鬱な空氣にとざされてゐた天氣は、夜に入つて果然雨となつた、はじめのうちは霧雨のやうな微雨であつたのが、夜が更けるにつれてだん〳〵本調子となつていつた。

只一人の宿直室は淋しかつた。好きな教科の研究に小二時間程餘念の無かつた新葉訓導は、ボン〳〵と時計が九時を打つたのを機會のやうに研究の手を措くと、

「サア夜の巡視だ。」

と獨りごつて、提灯に明りをつけると、廊下を南校舎から北校舎へ一まはり、「何も異狀はないか」と見廻りに出かけた。

× × ×

訓導が眼をさましたのは六時半ごろであつた。枕に近い窓には依然として雨の音。否、雨に加はる可なり激しい風の音さへ聞えるではないか。

「サアひどくならねばよいが……」

と、ガバ〻はね起きた訓導は、素早く朝の身仕度をすますと、宿直簿に丹念に記帳し捺印型の如くそれを携へて、まだ誰も來ぬガランとした職員室へ這入つていつた。

それから小一時間ばかり……

雨風は次第々々に激しくなつてゆく……

その風雨を衝いて、午前七時半ごろから、早生徒達がそろ〳〵登校して來だした。

「一寸でも混雜を少くしよう……」

宿直の身は、そうした事にまで氣を配らねばならなかつた。

訓導は正門の開きを、わざ〳〵一ぱいに直したり、昇降場の整頓をしたり、何くれとなく氣を使つてゐた。

四十分—四十五分—

雨傘、洋傘、防水マント、長靴、足駄さま〻〳〵の生徒が、いつもの三倍四倍の嵩高に、正門から續々とやつて來る。

同僚の訓導も出勤してくる、學校は急に賑かになつてきた——かうして風雨の次第につのりゆくにつれて、始業時刻の八時も近づいてきたのである。

二、古い南校舍危し

七時五十分ごろ——急速度に惡化した風雨は、今はもう純然たる大暴風雨の症狀を呈して來た。

生徒たちは、各教室でどうなることかと不安の念にオド〻〳〵するばかり……

出勤の訓導は、皆教へ子と教室の事を心配して、夫々おのが教室の方へ出かけてゆき、何くれとなく看護に當り乍ら、危險の未然防止につとめてゐた——

と、此時、誰云ふとなく

「南校舍が危いぞッ！」

と云ふ聲が、パッと訓導達の耳をかすめた。

事實、南校舍の方は、眞南からの風を受けてゐる事とて、北校舍に比べて、ずつと風當りがひどかつた。かつて加へて、建築年度も南校舍の方が、北より古かつたのである。

「南校舍が危險！」

それは訓導たちの頭を電撃の様に打つた。

わけても第一時の始業まで、學校内の全責任を背負つて居る宿直員の新葉訓導は、その瞬間ハツと血が逆流するやうに感じた。

北校舍の階上にある己が受持の四年は組の教室からは、ふきつける雨にけぶる硝子戸をすかして暴風雨の中にその南校舍が見すかされた。ゴーゴーと吹く風毎に、ユラ〳〵と校舍全體が危ふく搖ぐさまは、事實以上にその危險を感じさせた——

「コレは大變だッ！」

新葉訓導は、受持の生徒たちに早口に、

「こゝは大丈夫だから安心せ、先生は一寸南校舍へ行つてくるから！」

と云ひのこすと、慌しく教室を出かけていつた。

三、二生徒を救ひて殉職

この時、南校舍の各組では、

「危險！」

と見てとり、一齊に避難行動に移つてゐた、

ドドドドッとかける音、泣き喚く聲、叱咤の聲——

さながら戰場の様な中を、山本訓導と共にかけつけて來た新葉訓導は、流石に興奮して、

「二階はどうだ、二階は？」

と誰にともなく尋ねる様に云つたが、勿論之に答へる何ものもなかつた、否、その場合、そうした聲が誰の耳にも這入らなかつたといふのが本當であつたかも知れぬ——

「見て來やう、二階を——」

訓導は飛ぶやうに階上さしてかけ上つていつた。

と、引きつけられでもしたかの様に山本訓導もつゞひて又……

と、果然、二階にはまだ二人、六年生がオロ〳〵してゐるではないか？

「オイッ！早く／＼ッ！」
から叱りつけるやうに激しく云つて、二人の子供に階段の方へ避難を命ずるや、一氣に又奥の教室の方へ……
が、流石に階上には、もう此の二人の外に誰も居殘つてはゐなかつた。
「よーし」
安心した訓導はすぐ引かへしてきた。瞬間訓導の頭に北校舍の受持學級の子供の事が案じられて來た。——
「早く北校舍へ引かへして、受持の子たちを……」
そう思つて、宙を飛ぶやうに舊の階段の方へ……
此時、後からつゞいて上つて來た山本訓導が先に、その次をさつきの二人の六年生が、その後二間ほどの所を新葉訓導が、そして殆んど同じ早さで階段をかけ下りかけた一刹那？
それは北校舍で、芦田訓導はじめ決死の訓導たちが、逸早く階上の四年組の生徒たちを階下へおろし、階下二年教室の廊下で、あの
「早く机の下へもぐれッ！」

といふ名號令をかけてゐた頃——
天地も碎けよとばかり吹きつけた魔の突風に、南校舍は一たまりもなく倒壞し、あはれ新葉訓導はその下敷となつて悲壯な最後をとげたのであつた。
その死の直前、
ユラユラッとした時、訓導は
「危いッ！」
と一聲、その前に思はず居すくんだ六年の二人を、ありつたけの力で、安全の場所へ突きばすやうに押しやつた。
この爲め、二人の生徒は眞に危機一髪のところを、微傷さへ負はず助かつたのであつた。
あゝ！新葉庄司訓導亦身を殺して仁をなせるもの、おゝ貴き鶴橋學園犧牲の人柱よ！

第十四章　松浦すゑ訓導の殉職

——京都市淳和小學校——

一、雨中の第一時授業始まる

昭和七年夏、舊の校名四院を改めて淳和としてからは、外には校舍の改增築を、內には學級の增加と教育教授の充實を着々として行ひ、現在では右京區に於て、おしもおされもせぬ雄校としての存在を示してゐる淳和小學校——

その淳和校では、九月二十一日の朝、午前八時十五分といふに、始業定刻を寸秒違えず、折からの强雨の中を、全校一齊に第一時の授業をはじめたのであつた。

北校舍の階下にズラリと並んだ一年生の七ケ教室では、西の端から、いろは順の學級に、い組は中島訓導、ろ組は松浦女訓導、は組は安岡女訓導、に組は猪野訓導……

と、七名の訓導が夫々算術やら讀方の巧みな新教授にかゝつて居り、その階上なる三年八ケ學級

の教室でも、同樣、外のジメ〳〵と壓しつけられるやうな天氣と、まるでうらはらの、いと朗らかなのびやかな教授がはじまつてゐた——

と、もの〻五分も經たぬうちに、急に吹きつけだした强風は、猛雨を誘ひ、南方からビュウ〳〵と、南側の窓硝子を打ちはじめた。

ガタ〳〵〳〵と硝子窓の搖れる音、雨の音、風のうなり……

今までの落ちついた生徒の心は、忽ちかき亂されてしまひ、何となくソハ〳〵と落つかぬ不安な心持が、すべての生徒の心を捉えてしまつた。

それを又訓導は夫々、力をこめて舊の注意の集中と落つきにとり戻さうと、一しほ熱心に教授をつゞけてゆく……

そうする中にも、强風は烈風に、烈風は狂風に、そして遂に純然たる暴風となつてしまつた。

その間、ほんの五分間を出でなかつたのである。

二、避難命令下る

此の時、山田校長は事態容易ならずと見てとり、横谷首席訓導と打ち合せ、風向上最も危險の懼

れの多分にある二階建北校舍の三年と一年生全部を、校内きつての安全地帶である講堂へ、避難させる事にした。

「では……」といふので、横谷首席は、大急ぎで北校舍階上へ駈け上つて行つた。そして三年主任の松尾訓導の教室をのぞくなり、

「松尾君、御覽の通りで、とてもひどいから、三年と一年を講堂へ避難することにする……早く三年の擔任にそうするやう、告げて呉れ給へ……僕も云ふには云ふが……」

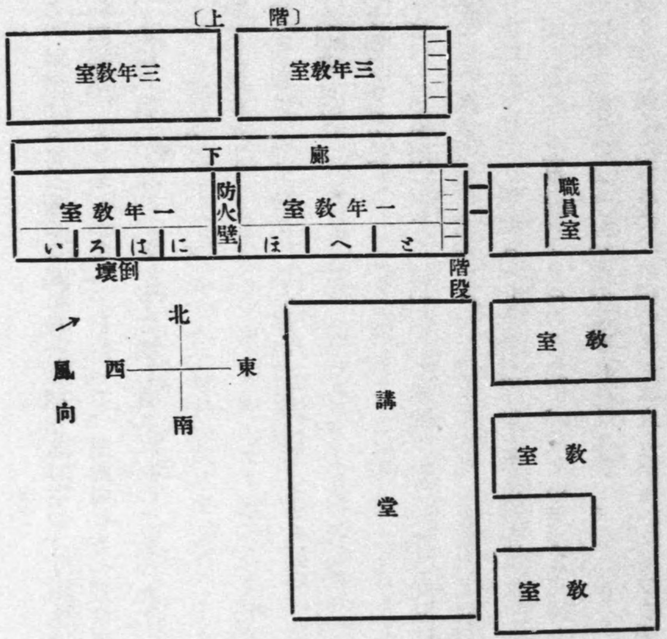
と云ふが早いか、さつと階下の一年級の方へ下りていつた。

この時階下の一年七ケ學級では、早くも校長からの知らせで避難行動に移らうとしてゐた。即ち各學級とも一齊に北廊下へ生徒を出し、講堂に近い教室の生徒を先登に、順々に移動避難にかゝつたところであつた。

一方、階上の三年生八ケ學級では、松尾主任訓導の疾風迅雷的な處置で、全學級が、

「ソレツ！」

とばかり、これ又北廊下に出ると、急ぐ中にも秩序正しく、ドドドドツ！と北階段をかけ下り、講堂へ〳〵と避難しはじめたのであつた——



三、四訓導の死傷

かうして階上では三年生八ケ學級の過半五ケ學級が、階下では一年生に組の先頭が、辛くも避難し終つた午前八時二十六分ごろ!!

物凄いうなりを立てゝ、一きは激しく吹きつけた魔風に、北校舍は「がくりツ!!」とゆすり動かされたかと見る間に、中央防火壁を境に、西半分階上階下八ケ教室が「メリ〳〵〳〵ツ」と一大音響を立てゝ、アツと云ふ間に摧と倒壊してしまつた。